

安養寺跡（第8次）・古堀遺跡（第9次）
北野遺跡（第9次）・露越遺跡（第10次）

発掘調査報告

—多気郡明和町上野・斎宮一

2018（平成30）年3月

三重県埋蔵文化財センター



古堀遺跡 SF902 土師器焼成土坑（南から）

例　言

- 1 本書は三重県多気郡明和町上野に所在する安養寺跡（第8次）・古堀遺跡（第9次）・北野遺跡（第9次）発掘調査および同町斎宮に所在する露越遺跡（第10次）発掘調査にかかる報告書である。
- 2 発掘調査は、平成28年度高度水利機能確保基盤整備事業（斎宮地区）に伴い、三重県松阪農林事務所の労務提供により行った。なお、発掘調査の経費は、一部国庫補助金を得て三重県教育委員会が負担し、他は三重県農林水産部から経費の執行委任を受けた。
- 3 発掘調査期間は平成28年10月11日～平成29年3月14日である。
- 4 4遺跡の発掘調査面積は、合計700m²である。

- 5 発掘調査体制は次の通りである。

調査主体 三重県教育委員会

〔現地調査 平成28年度〕

調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究1課

主 事 杉村 聰

技 師 鐸木 厚太

主 任 石井 智大

渡辺 和仁

技 師 水谷 侃司

〔整理作業 平成29年度〕

整理担当 三重県埋蔵文化財センター

技 師 鐸木 厚太

自然科学分析 樹種同定及びプラント・オパール分析 株式会社パレオ・ラボ

- 6 本書の執筆は第II章を伊藤文彦が、第V章は株式会社パレオ・ラボが、それ以外を鐸木が行った。遺物写真の撮影・全体の編集は鐸木が行った。

- 7 発掘調査および整理作業に際しては、下記の機関に御協力を賜った。

丸亀産業株式会社、株式会社辻井組、明和町斎宮跡・文化観光課、三重県松阪農林事務所（順不同、敬称略）

- 8 調査図面・写真・出土遺物は三重県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　例

- 1 本書では、国土地理院発行の1:50,000 数値地図（「松阪」相当、平成21年5月発行）、三重県共有デジタル地図の1:2,500 地形図（06PF441番、06PF442番）を用いた。
三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合の承認を得て使用した（三総合地第1号）。
- 2 標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。
- 3 本書で用いた座標は世界測地系に基づくものである。方位は第VI座標系の座標北で示した。
- 4 本書で用いる遺構略号は以下のとおりである。
SK：土坑 SD：溝 SH：堅穴建物 SF：土器焼成土坑 Pit：柱穴
- 5 土色の表記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、1967年初版）に拠った。
遺物観察表における土器の色調表記もこれに従う。
- 6 遺物実測図の縮尺は土器・陶器を1:4とし、石器を1:1とした。
- 7 註は各節の文末に付し、参考文献は各章の文末に記した。
- 8 遺構一覧表、遺物観察表は各節末に付した。
- 9 写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告番号と対応する。遺物写真は縮尺不同である。

目 次

例言・凡例

目 次

第I章 前 言	• • • • • 1
第1節 調査に至る経過	• • • • • 1
第2節 文化財保護法に関する諸手続き	• • • • • 1
第3節 調査経過	• • • • • 1
第II章 位置と環境	• • • • • 3
第1節 地理的環境	• • • • • 3
第2節 歴史的環境	• • • • • 4
第III章 安養寺跡・古堀遺跡・北野遺跡の調査	• • • • • 5
第1節 調査概要	• • • • • 5
第2節 基本順序	• • • • • 5
第3節 遺構	• • • • • 8
第4節 遺物	• • • • • 24
第IV章 露越遺跡の調査	• • • • • 31
第1節 調査概要	• • • • • 31
第2節 基本順序	• • • • • 31
第3節 遺構	• • • • • 33
第4節 遺物	• • • • • 34
第V章 安養寺跡・古堀遺跡における自然科学分析	• • • • • 35
第1節 安養寺跡第8次調査出土炭化材の樹種同定	• • • • • 35
第2節 古堀遺跡第9次調査出土炭化材の樹種同定	• • • • • 36
第3節 安養寺跡第8次調査のプラント・オパール分析	• • • • • 38
第4節 古堀遺跡第9次調査のプラント・オパール分析	• • • • • 39
第VI章 総 括	• • • • • 44

挿図目次

第1図 遺跡位置図	• • • 3	第19図 安養寺跡出土遺物実測図②	• • • 26
第2図 遺跡地形図	• • • 4	第20図 古堀遺跡出土遺物実測図	• • • 27
第3図 調査区位置図	• • • 6	第21図 北野遺跡出土遺物実測図	• • • 28
第4図 基本層序図	• • • 7	第22図 調査区位置図	• • • 31
第5図 調査区平面図①	• • • 9	第23図 基本層序図	• • • 32
第6図 調査区平面図②	• • • 10	第24図 調査区平面図	• • • 32
第7図 調査区平面図③	• • • 11	第25図 個別遺構図	• • • 33
第8図 調査区平面図④	• • • 12	第26図 出土遺物実測図	• • • 34
第9図 調査区平面図⑤	• • • 13	第27図 復元直径分布	• • • 36
第10図 個別遺構図①	• • • 14	第28図 安養寺跡第8次調査出土炭化材の電子顕微鏡写真	• • • 40
第11図 個別遺構図②	• • • 15	第29図 古堀遺跡第9次調査出土炭化材の電子顕微鏡写真	• • • 41
第12図 個別遺構図③	• • • 16	第30図 安養寺跡第8次調査植物珪酸体の電子顕微鏡写真	• • • 42
第13図 個別遺構図④	• • • 17	第31図 古堀遺跡第9次調査植物珪酸体の電子顕微鏡写真	• • • 43
第14図 個別遺構図⑤	• • • 18		
第15図 個別遺構図⑥	• • • 19		
第16図 個別遺構図⑦	• • • 20		
第17図 個別遺構図⑧	• • • 21		
第18図 安養寺跡出土遺物実測図①	• • • 25		

表目次

第1表 安養寺跡第8次調査遺構一覧表	• • • 23	第7表 露越遺跡第10次調査出土遺物一覧表	• • • 34
第2表 古堀遺跡第9次調査遺構一覧表	• • • 23	第8表 安養寺跡第8次調査出土炭化材の樹種同定結果	• • • 35
第3表 北野遺跡第9次調査遺構一覧表	• • • 23	第9表 古堀遺跡第9次調査出土炭化材の樹種同定結果	• • • 37
第4表 安養寺跡第8次・古堀遺跡第9次・北野遺跡第9次調査出土遺物一覧表①	• • • 29	第10表 試料1g当りのプラント・オパール個数	• • • 38
第5表 安養寺跡第8次・古堀遺跡第9次・北野遺跡第9次調査出土遺物一覧表②	• • • 30	第11表 試料1g当りのプラント・オパール個数	• • • 39
第6表 露越遺跡第10次調査遺構一覧表	• • • 33		

写真図版一覧

写真図版1 (SF902 土師器焼成土坑)	• • • 46	写真図版7 (古堀遺跡 調査区全景・土師器焼成土坑)	• • • 52
写真図版2 (航空写真・全景写真)	• • • 47	写真図版8 (古堀遺跡 土師器焼成土坑)	• • • 53
写真図版3 (安養寺跡 調査区全景)	• • • 48	写真図版9 (古堀遺跡 土師器焼成土坑・土坑)	• • • 54
写真図版4 (安養寺跡 土坑・土師器焼成土坑)	• • • 49	写真図版10 (北野遺跡 調査区全景・土坑・溝)	• • • 55
写真図版5 (安養寺跡 土坑・溝・土師器焼成土坑)	• • • 50	写真図版11 (安養寺跡 出土遺物)	• • • 56
写真図版6 (安養寺跡 溝・土坑・堅穴建物)	• • • 51	写真図版12 (古堀遺跡 出土遺物)	• • • 57
		写真図版13 (露越遺跡 調査区全景・溝・土坑)	• • • 58

第Ⅰ章 前 言

第1節 調査に至る経過

本書で報告する遺跡は、平成28年度高度水利機能確保基盤整備事業（齋宮地区）に伴い、記録保存調査を実施したものである。

平成22年度、三重県農林水産部農業基盤室において農業用管水路の埋設工事の実施が計画され、三重県教育委員会に協議があった。三重県埋蔵文化財センターが計画を精査したところ、工事予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地（安養寺跡、古堀遺跡、北野遺跡、露越遺跡）が所在することが判明した。そこ

で、その保存について協議を重ねたが、現状保存は困難と判断し、平成28年度上半期に範囲確認調査を実施することとした。さらに、範囲確認調査の結果をふまえて調査範囲を確定し、平成28年度下半期に労務提供による発掘調査を実施した。

発掘調査を実施した平成28年度において、工事の事業主体は、三重県農林水産部農業基盤課であり、調査主体は三重県教育委員会、調査担当は三重県埋蔵文化財センターである。

第2節 文化財保護法に関する諸手続き

文化財保護法（昭和25年法律第214号）および三重県文化財保護条例（昭和32年条例第72号）にかかる諸手続きは以下のとおりである。

- 文化財保護法第94条第1項、三重県文化財保護条例第48条第1項に基づく発掘通知
 - ・平成24年6月1日付 松農第4168号
 - 三重県知事から三重県教育委員会教育長あて「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知」

- 文化財保護法第100条第2項に基づく文化財の発見・認定通知
 - ・平成29年11月17日付け 教委第12-4418号
 - 三重県教育委員会教育長から松阪警察署長あて「埋蔵文化財の発見について（通知）」

第3節 調査経過

（1） 調査の概要

平成28年5月11・12日に工事面積約1,010m²を対象に、50カ所の調査坑を設けて範囲確認調査を行った。その結果、安養寺跡、古堀遺跡、北野遺跡では多くの調査坑から古代を中心とした土器が出土したほか、溝や土坑なども確認された。また、露越遺跡では、一部の調査坑において、古代から中世の土器が出土し、基盤層上面で柱穴などが確認された。

これらの結果から平成28年度下半期に労務提供による発掘調査を実施することとした。管水路は道路下に埋設するものであった。そこで、発掘調査は現状道路のうち管水路を設置する範囲について実施す

ることとした。そのため、安養寺跡、古堀遺跡、北野遺跡は幅約1m、延長610mに及ぶ長大な調査区となった。露越遺跡も同様に、調査区の規模は幅約1m、延長90mに及んだ。

調査の方法は、重機（バックホー）による表土除去ののち、人力によって包含層掘削を行い、基盤層上面で遺構の検出及び遺構掘削を行った。調査は条件の整った個所から順次行うこととし、平成28年10月から平成29年3月にかけて断続的に実施した。

（2） 発掘調査の経過

調査は平成28年10月から平成29年3月かけて断続的に調査を行った。詳細は次頁の調査日誌に記す。

【調査日誌（抄）】

平成28（2016）年

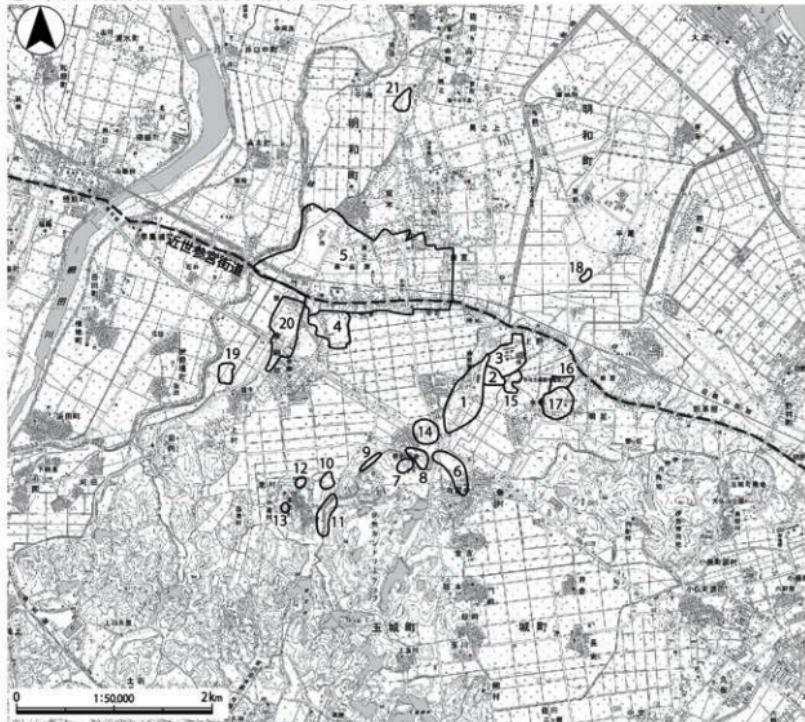
10月 6日	松阪農林事務所、施工業者（丸亀産業株式会社、有限会社辻井組）と協議。	11月 17日	午前：調査。 重機掘削。
10月11日	安養寺跡第8次・古堀遺跡第9次調査開始。 重機掘削・人力遺構掘削。		圃場整備に伴う痕跡が面的に括がっていることを確認。
10月12日	重機掘削・人力遺構掘削。		午後：埋戻し。
10月13日	人力遺構掘削。 遺構写真、図面作成。		露越遺跡調査終了。
10月14日	人力遺構掘削。 遺構写真、図面作成。	11月22日	北野遺跡第9次調査開始。 重機掘削、遺構検出、 人力遺構掘削、写真撮影。
10月17日	午前は雨で中止。午後から作業実施。 人力遺構掘削。 遺構写真、図面作成。	11月24日	人力遺構掘削、写真撮影、 図面作成。
10月18日	人力遺構掘削。 遺構写真、部分全景写真、図面作成。	11月25日	人力遺構掘削、写真撮影、 図面作成。 北野遺跡調査終了。
10月19日	人力遺構掘削。 遺構写真、部分全景写真、図面作成。	11月26日	埋戻し。
10月20日	埋戻し。	12月14日	安養寺跡第8次再調査開始。 重機掘削。
10月21日	埋戻し。		埋設管を確認し、遺構が希薄であることを確認。
11月15日	露越遺跡第10次調査開始。 午前：調査。 重機掘削。 遺構検出、人力遺構掘削、 写真撮影、図面作成。 午後：埋戻し。	12月15日	明和町：乾・味噌井両氏来跡。 遺構検出、人力遺構掘削、 写真撮影、図面作成。 安養寺跡調査終了。
11月16日	午前：調査。 重機掘削。 ピット検出、人力遺構掘削 写真撮影、図面作成。 午後：埋戻し。	12月16日	埋戻し。
		平成29（2017）年	3月13日 北野遺跡第9次再調査開始。 重機掘削、遺構検出、人力遺構掘削、 写真撮影、図面作成。 雨により午後3時調査終了。
		3月14日	人力遺構掘削、写真撮影、図面作成。 北野遺跡調査終了。
		3月15日	埋戻し。

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

北野遺跡（1）、古堀遺跡（2）、安養寺跡（3）、露越遺跡（4）は三重県多気郡明和町に所在する。高見山地を発する櫛田川は、河口付近に平野を形成して伊勢湾へそそぐ。櫛田川南岸には標高100mから30mの玉城丘陵が展開する。その北側には明野台地と呼ばれる更新世段丘が接続し、標高は2mから

25mを測る。段丘堆積物は、主に礫層からなる。礫種は領家深成岩類の花崗岩類を主体とし、わずかにチャートを含む。基質はシルト質～粘土質で緻密である。遺跡周辺の植生としては、クリやコナラ、リョウブなどができる雑木林が存在する。



- | | | | |
|----------|------------|--------------|-----------|
| 1. 北野遺跡 | 7. 発シB遺跡 | 13. 世古D遺跡 | 19. 川原口遺跡 |
| 2. 古堀遺跡 | 8. 坪場遺跡 | 14. 堀田遺跡 | 20. 金剛坂遺跡 |
| 3. 安養寺跡 | 9. 長五郎林B遺跡 | 15. 仲畠遺跡 | 21. 粟垣内遺跡 |
| 4. 露越遺跡 | 10. 戸峯A遺跡 | 16. 水池土器製作遺跡 | |
| 5. 斎宮跡 | 11. 戸峯B遺跡 | 17. 黒土遺跡 | |
| 6. 発シA遺跡 | 12. 大道A遺跡 | 18. 曾祢崎遺跡 | |

第1図 遺跡位置図 (1:50000)

第2節 歴史的環境

今回の調査対象地である4遺跡の東方約10kmの位置には伊勢神宮が所在する。伊勢神宮は調査地周辺の歴史的環境に対し、極めて大きな影響を与えていく。

まず、露越遺跡の北側に隣接して、古代から中世にかけて伊勢神宮に奉仕した斎王の宮殿とそれを取り巻く官衙群からなる斎宮跡（5）が所在する。これまでの調査で、飛鳥時代から遺構が認められることや8世紀には古代伊勢道を遮蔽するかのように方格地割が造成され都市的空間が出現したこと、12世紀以降衰退していくことなどが明らかとなっている。

一方、古代以降の調査対象地周辺は、斎宮や伊勢神宮の活動を支える地域として機能したと考えられる。このうち、北野遺跡や古堀遺跡は、伊勢神宮や斎宮へ土師器を供給した遺跡と考えられている。北野遺跡ではこれまでの調査で土師器焼成土坑が28基確認されている。土師器の生産時期は6世紀中頃から8世紀後半の約250年間に及ぶ。土師器の製作に伴う施設としては、粘土溜、掘立柱建物、竪穴建物、廐棄土坑なども確認されている。隣接する古堀遺跡でも61基の土師器焼成土坑が検出されており、両遺

跡合わせて土師器生産を担った「有爾郷」の中心地と考えられている。このほか、周辺には水池土器製作遺跡（16）や戸峯A遺跡（10）など、土師器焼成を行った遺跡の密度が高く分布する。

一方、安養寺は斎宮がほぼ機能を停止した後の、永仁5年（1297）の建立になる寺院である。最盛期には百間四方の境内の周囲を堀が開挖し、内部に堂塔が並ぶ大寺院であったという。天正4年（1576）頃堂塔は戦火で焼失したとされるが、今日も、參宮街道沿いに法灯を繼ぐ寺院が残る。旧安養寺跡には、昭和19年（1944）に陸軍亀山病院分院が建設され、以降病院として利用されている。これまでの調査で寺域西側の南北の堀を確認している。このほか、奈良時代の土師器焼成土坑、竪穴建物、井戸、土坑が検出されている。

調査地周辺は近世以降も引き続き日本各地と伊勢神宮を結ぶ參宮街道として機能し続けた。

参考文献

明和町史編さん委員会 2004『明和町史 史料編 第一巻 一自然・考古』明和町



第2図 遺跡地形図 (1:15000)

第Ⅲ章 安養寺跡・古堀遺跡・北野遺跡の調査

第1節 調査概要

(1) 調査の目的

安養寺跡・古堀遺跡・北野遺跡は多気郡明和町上野に所在する。高度水利機能確保基盤整備事業斎宮地区（斎明線）に伴い、平成28年10月から平成29年3月にかけて断続的に発掘調査を行った。調査区の幅は1.0～1.1mと狭いが、総延長は約610mに及ぶ。そのため、斎明線の事業範囲は安養寺跡・古堀遺跡・北野遺跡の3遺跡にまたがる。よって、この章では安養寺跡・古堀遺跡・北野遺跡の調査をまとめて報告する。

(2) 各遺跡における既往調査の成果

安養寺跡は、第Ⅱ章で述べたように多くの堂宇が立ち並ぶ大寺院であったとされる。文献上に安養寺の名が記載されるも、その後の土地利用により、長らく実態が不明な寺院であった。しかし、明和町が病院の建て替え工事に伴う発掘調査を実施した結果、寺院を開創したとされる幅4～5m、深さ約2mの堀を確認したほか、掘立柱建物や井戸、瓦窯などを検出した¹⁾。また、青磁、瓦、天目茶碗、仏具、風炉、硯、五輪塔など13世紀末から16世紀にかけての遺物が出土している。このほかにも、寺院建立前のほぼ奈良時代に該当する8世紀代の土師器焼成土坑や堅穴建物、掘立柱建物などが確認されている。

古堀遺跡では、過去8回の調査が行われ、7世紀から8世紀にかけての土師器焼成土坑61基が確認されている²⁾。北野遺跡では、過去9回の調査が行

われており、土師器焼成土坑が228基確認されている³⁾。土師器の生産時期は6世紀中頃から8世紀後半にかけての250年間に及ぶ。生産された土師器の器種は、椀、杯、皿、甕、鍋、瓶などの供膳具や調理具のほか、土馬や筒形土器、有孔広口筒形土器など特殊な器種も出土している。

(3) 調査の手法

調査は、埋設水路の掘削幅にあわせて、水路設置前に発掘調査を行った。調査に伴う地区杭の設定はできなかったが、埋設水路工事に使用する幅杭を使用した。この幅杭には、整数値ではないが、座標と高値の情報を持っていたため、この杭を使用して、平面図と土層図等の記録類を行った。表土から遺構面までの堆積土を重機（バックホー）で除去し、遺構検出・掘削、記録類等の作成は三重県埋蔵文化財センター職員で行った。

註

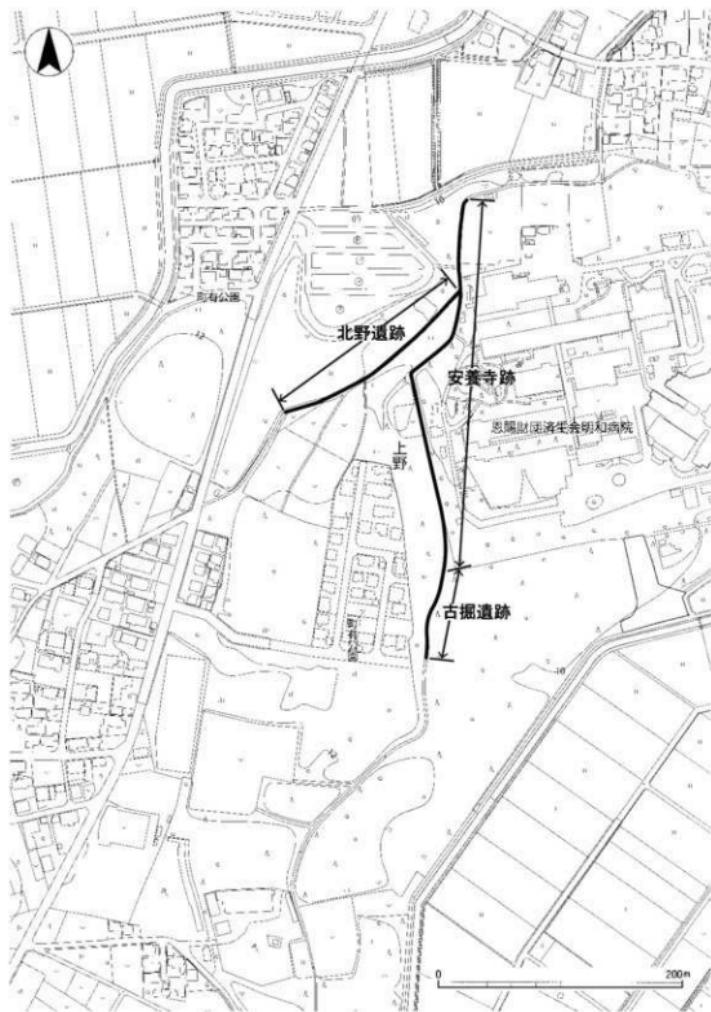
- 1) 明和町斎宮跡・文化観光課 2016『安養寺跡を探る－安養寺跡発掘調査概要－』明和町
- 2) 明和町斎宮跡・文化観光課『明和町文化財解説シート 土器つくりのさと・有爾郷-Na1』
- 3) 明和町史編さん委員会 2001『明和町史 史料編 第一巻－自然・考古－』、三重県 2008『三重県史 資料編 考古2』

第2節 基本層序

(1) 調査地の地形（第3図）

安養寺跡・古堀遺跡・北野遺跡は玉城丘陵から伸びる尾根の北端、明星面とよばれる高位段丘面上に立地する。遺跡の周辺は、スギなどの植林帯が広がり、土地が安定していることから耕作利用や、近年では新興住宅街や病院などの土地開発が盛んな地域でもある¹⁾。

3遺跡が立地する標高は、尾根上に立地していることから、周辺の標高が平均で3～4mに対し、10～12mとやや高めである。よって、遺跡が立地する尾根を南に走る県道鳥羽松阪線から望むと、周辺より小高い地形が読み取れる（第2図・写真団1参照）。なお、今回の調査区内では、中央のE地点121mが最も高く、次いでK地点の120mと高くなっ



第3図 調査区位置図 (1:4000)

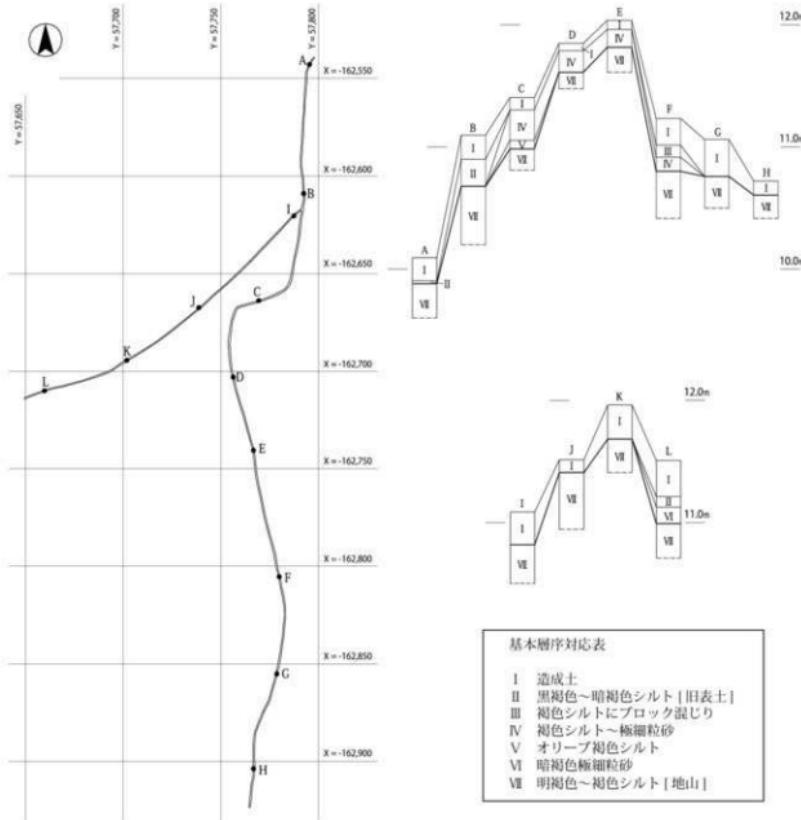
ている（第4図参照）。最も低いのは、北端のA地点10.1m、次いで南端のH地点10.7m、安養寺跡および北野遺跡の調査区接続部I地点11.1m、西端のL地点11.5mの順である。つまり、調査区中央部を頂上にして、北・南・西の三方へ標高が下がる地形となっている。

（2）基本層序（第4図）

安養寺跡・古堀遺跡・北野遺跡は、上述したように起伏がある尾根上に立地していることから、表土から遺構面までの堆積層は総じて薄かった。対象の調査地はアスファルト舗装がされていないとはいえる、道を固めるために行われた碎石などによる造成

や近現代の水道管・電線管設置により削平・擾乱を受けている場所も確認された。また、遺構が希薄な場所も多く、調査区すべての土層図を作成することはしなかった。そこで、安養寺跡・古堀遺跡・北野遺跡全体の土層堆積状況を簡潔に示すため、部分的に作成した土層断面図と、遺構土層図を使用して、基本層序図を作成した。

調査区自体は、幅10～11mと狭小であるが、南北約400m、東西約150mに広がり、地形の起伏があるため、土層の堆積状況は必ずしも均一ではないといえる。各地点において地山となっているのは、基本的に褐色系シルト（Ⅶ層）であり、その直上に



第4図 基本層序図 (1:2500)

包含層とみられる褐色シルト～極細粒砂に地山ブロックや礫を含む遺物包含層が確認される（Ⅲ～Ⅵ層）。地山は褐色系シルトを基本としているが、一部花崗岩風化層もF地点からG地点付近で確認している。また、遺物包含層からは古代から中世にかけての土器や陶器が出土した。部分的にⅢ～Ⅵ層の直上には、黒褐色シルトの旧表土（Ⅱ層）がみられる。また、地点によっては、造成土（I層）直下で、地山（Ⅶ層）の層序が確認された。

遺構検出面は範囲確認調査の成果から地山（Ⅶ層）の上面で検出を行った。遺構は古代の土器焼成土坑を中心に溝や土坑が検出された。次節では、遺構について、記述する。

註

1) 明和町史編さん委員会 2004『明和町史 史料編 第1巻
－自然・考古－』明和町

第3節 遺構

（1）安養寺跡

安養寺跡では、北から南へかけて順に報告する。よって、必ずしも番号順、遺構種別毎ではないことを明記しておく。また、調査区幅が狭小で調査区外へ続く遺構が多いため、規模や深さなどの数値は実寸である。これは、後述する古墳遺跡・野跡遺跡も同様である。

SK819（第10図） 調査区の北端で検出された長軸1.1m、深さ0.3mの土坑である。SK821を一部掘削して構築されている。古代の土器片が出土している。

SK821（第10図） 調査区の北端で検出された長軸1.0m、深さ0.3mの土坑である。遺物は出土しなかったが、切り合い関係からSK819に先行する。

SD820（第10図） 長さ0.6m以上、幅2.6mの溝である。3・4層は堆積状況から掘り直した可能性が高い。遺物は3層から古代の土器片が出土したが、小片であることから図化は行っていない。

SF806（第10図） 当初、残存状況が良好ではなかったため、遺構と認識せずに表土掘削後、壁面精査で判明した土器焼成土坑である。断面において長さ1.2mの範囲で地山への被熱痕が確認され、これが土器焼成土坑の床面と考えられる。壁面は確認されていないが、埋土から微量の炭化物と皿や杯、甕などの小片が出土している（第18図）。時期は7世紀後半から8世紀初頭と考えられる。

SK807（第10図） 長軸1.3m、深さ0.4mの円形状で、深い落ち込みが確認できる土坑である。SF806を掘削して構築されており、埋土には微量の

炭化物や焼土ブロックが含まれる。出土遺物は、供膳具より調理具が多く、ほぼ完形の甕が2点出土している（第19図）。また、8・9層はSK807との関係から先行する遺構である。

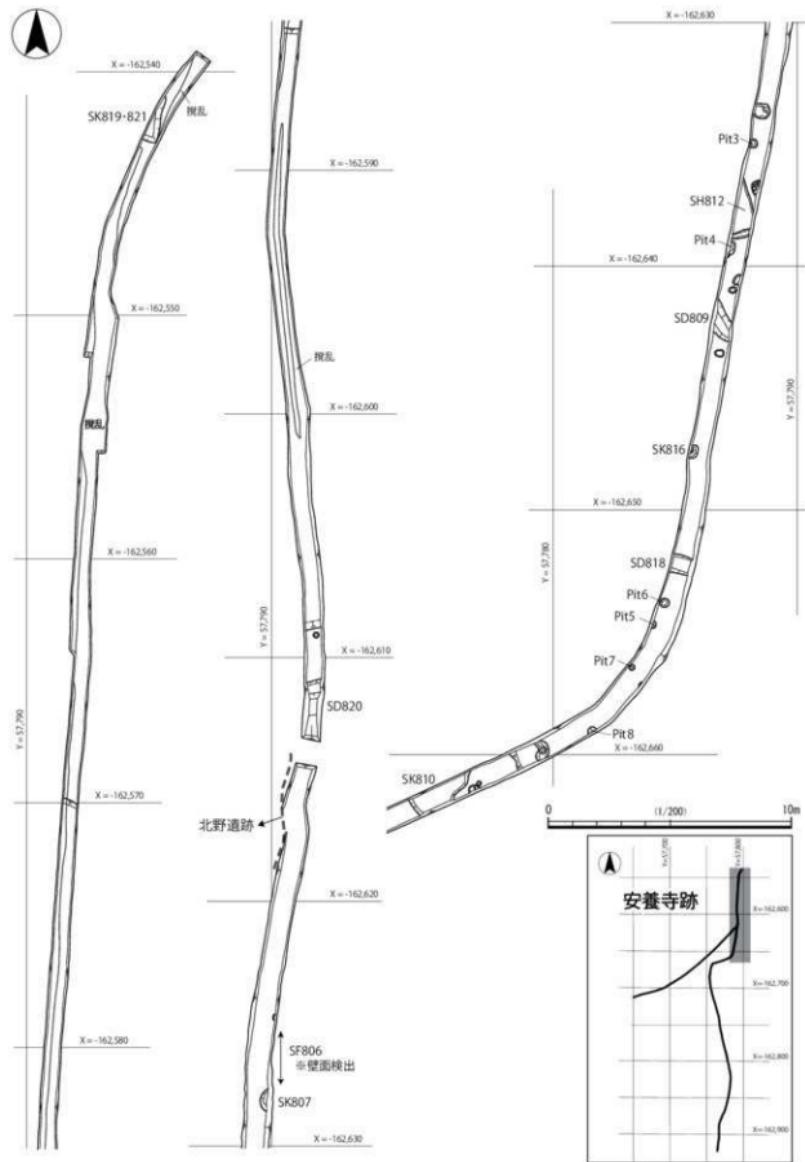
SH812（第11図） 東南部分のみ検出された堅穴建物である。規模は2.3m以上×1.1m以上で、平面形が方形もしくは長方形になる。主軸は西に約25度傾いている。幅0.2～0.3mの周壁溝が南壁際で検出されているが、東壁には周溝がない。土層図に示す17・19層は、堅穴建物内における支柱の抜取痕と考えられる。また、15層は粘性が高いシルト層が床一面に検出され、固くしまっている状況から貼床の可能性がある。時期は遺物が出土していないことから不明である。

SD809（第11図） 長さ1.2m以上、幅は平均で0.8mの溝である。東から西に「ハ」の字状に広がっている。遺物は皿や杯、甕などの土器片が出土しているが、小片や摩耗により図化できるものはない。

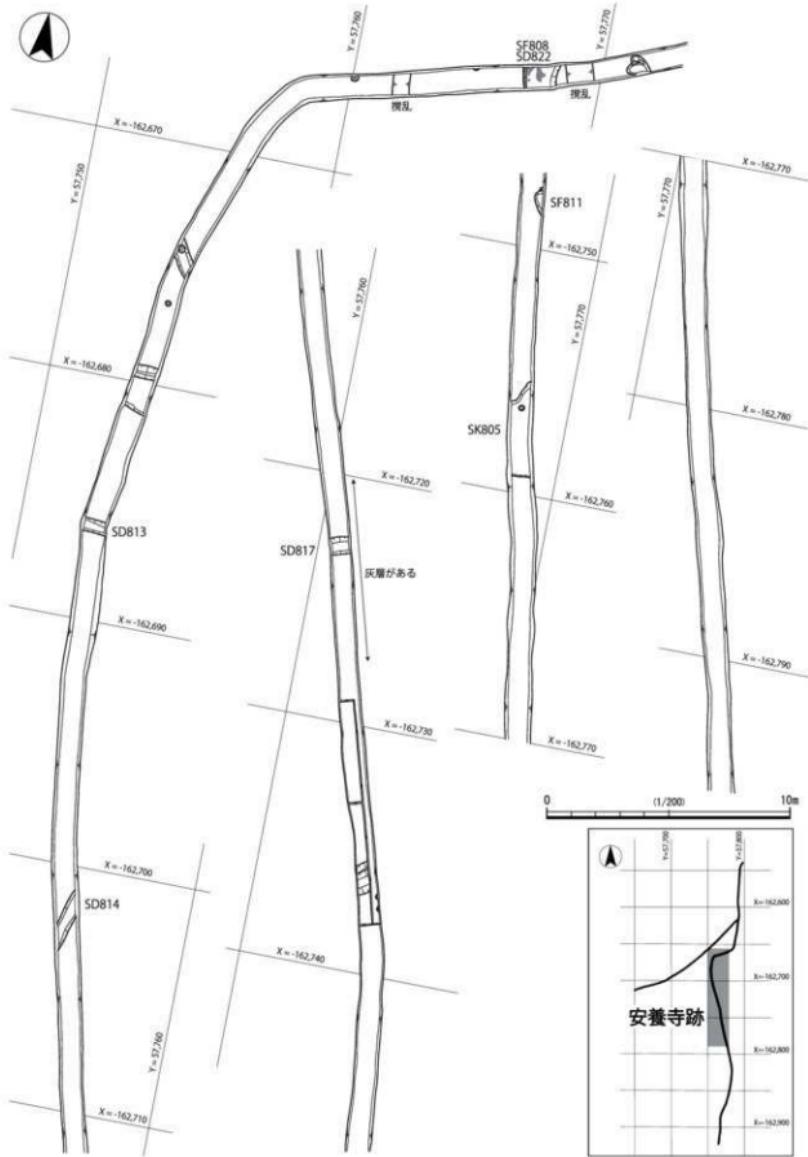
SK816（第11図） 長軸0.6mの平面円形状の土坑で、皿状に浅く落ち込んでいる。遺物としては、8世紀中頃の土器片Aが出土している（第19図）。

SD818（個別遺構図なし） 長さ0.7m以上、幅0.8mの溝である。7世紀後半から8世紀初頭と考えられる土器片が出土している（第19図）。

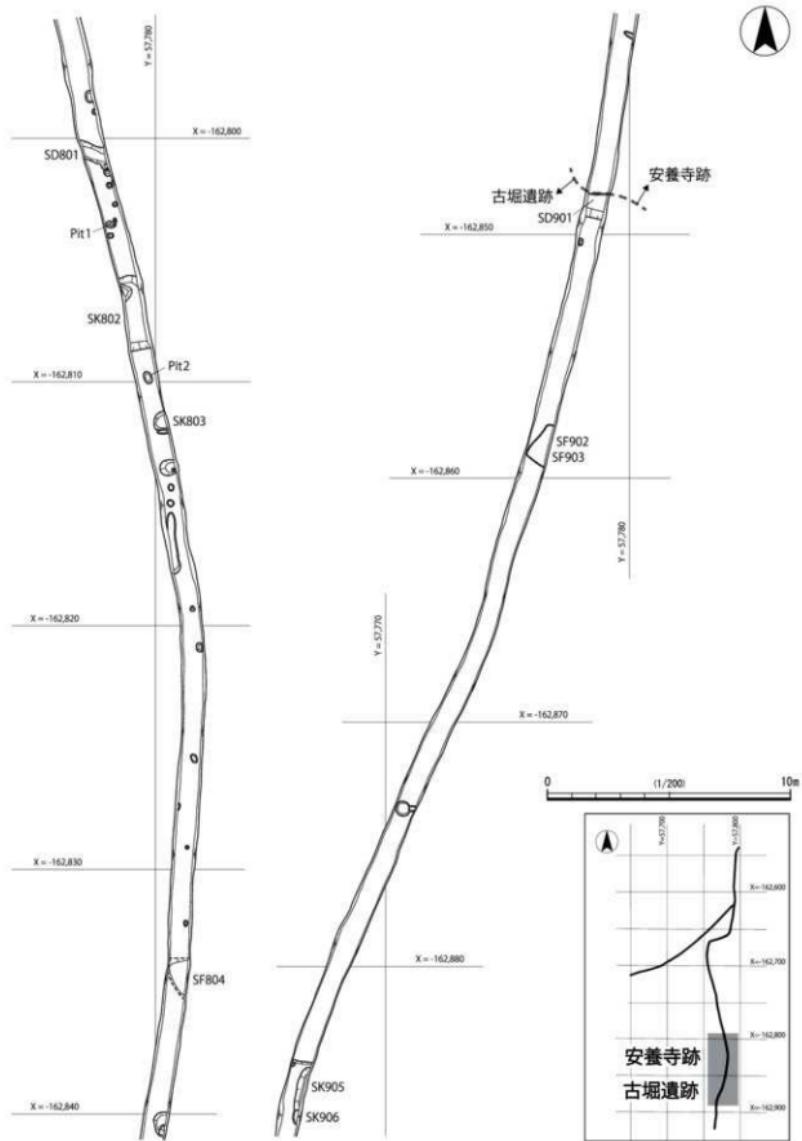
SK810（第11図） 東南部に屈曲を持つ不整形な土坑である。皿状に深く落ち込み、規模も大きめであるが、遺物の出土量は少ない。埋土より8世紀代の土器片が1点出土している（第19図）。



第5図 調査区平面図① (1:200)



第6図 調査区平面図② (1:200)



第7図 調査区平面図③ (1:200)

SF808 (第11図) SD822により一部削平を受けているが、土師器焼成土坑である。地山に掘り込まれて構築されている。西壁や床面は地山が被熱しており、特に西壁が被熱により焼き縮まっていた。床面の被熱は壁面と比べて弱く、点々と被熱しているのが特徴的である。被熱していない床面の直上からは、薪材とみられる炭化物が層状にみられる。このことから薪材によって熱が遮断され、被熱が進まなかつた可能性が考えられる。遺構内からは、7世紀後半から8世紀初頭の甕もしくは鍋とみられる破片が出土している（第18図）。

SD822 (第11図) 長さ1.0m以上、幅0.8m以上、深さ0.4mの溝で、SF808に後行する。遺物は出土していないため、時期が不明である。

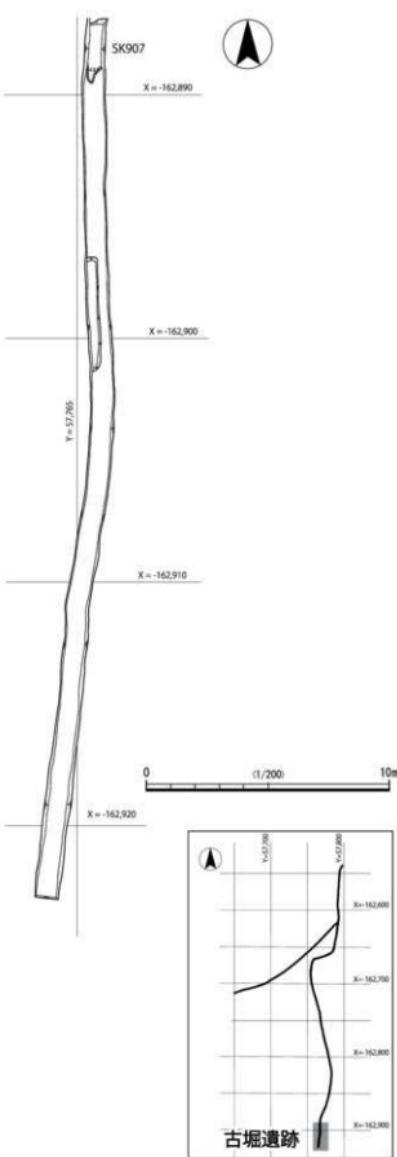
SD814 (第12図) 長さ1.6m以上、幅0.5m、深さ0.4mの断面箱形の溝で、調査区を斜行する。埋土からは8世紀前半の土師器杯が出土している（第19図）。

SD817 (第12図) 長さ0.8m以上、幅0.7m、深さ0.4mの断面V字形の溝である。検出できた溝の規模に対し、出土遺物量が多いのが特徴である。埋土からは8世紀前半から中頃の土師器が出土している（第19図）。

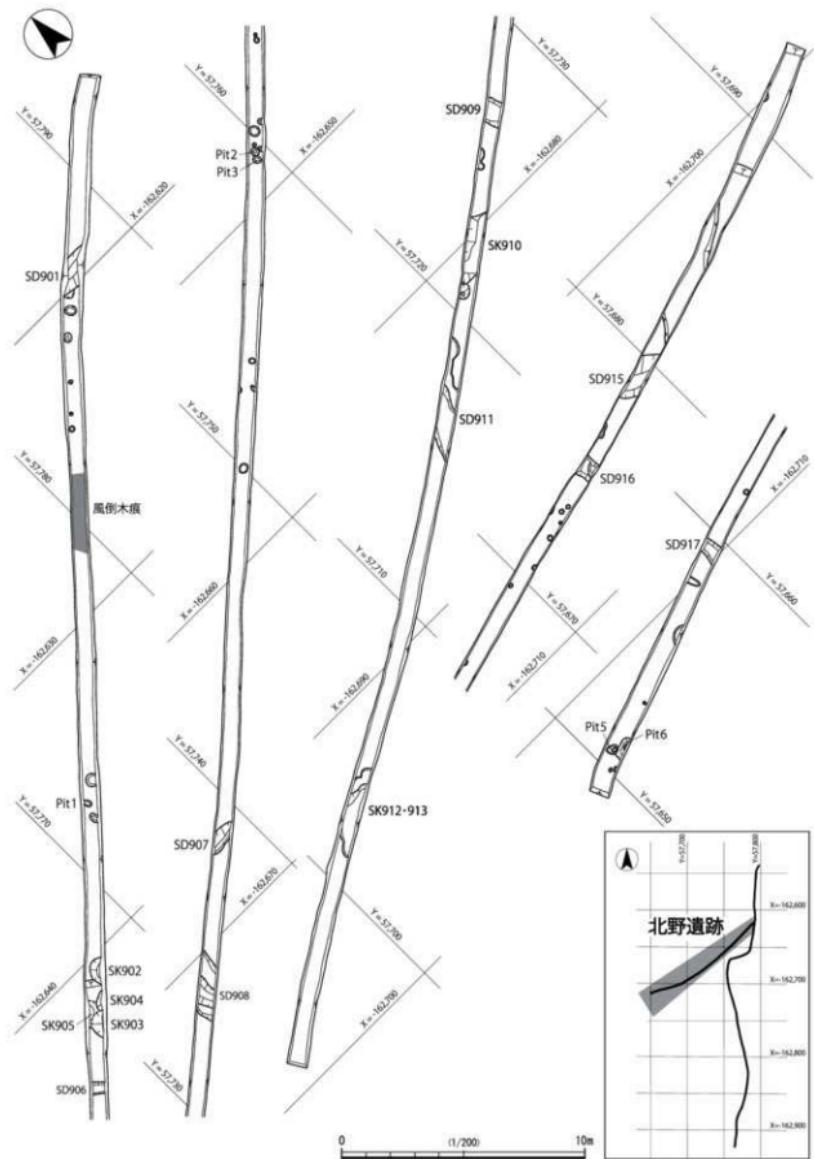
SF811 (第12図) 土師器焼成土坑である。側壁と奥壁と見られる2壁面を検出した。壁面床面とともに地山が被熱して、硬く焼き縮まっている。被熱層は最大で7cmの厚みになる。大部分は調査区外にあるが、検出規模は縦軸長が1.2m、横軸長が0.3mをはかり、実際の規模はそれ以上になることが予想される。図化は行っていないが、古代の土師器が出土している。

SK805 (第12図) 長軸3.2m以上、深さ0.4mの土坑である。9層と10層は硬化していることから堅穴建物の貼床の可能性がある。埋土より古代の土師器が出土している。細片であることから実測はしえなかったが、器種としては皿、杯、蓋、甕、瓶がある。

SK802 (第13図) 長軸3.1mの大型な土坑である。出土遺物は8世紀中頃の土師器杯と中世の土師器鍋が確認されており、遺構は中世に属するとみられる（第19図）。

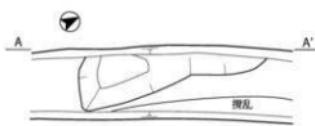


第8図 調査区平面図(④) (1:200)



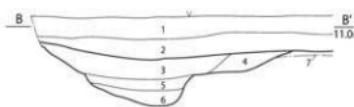
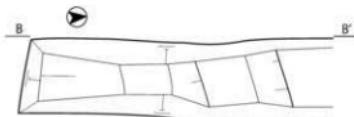
第9図 調査区平面図⑤ (1:200)

SK819・821



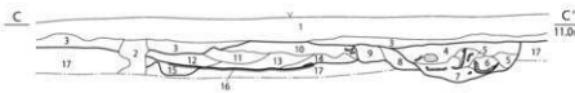
1. 造成土
 2. 7SYR2/2 黒褐色シルト + SYR5/B 明赤褐色砂ブロック微量を含む
 3. 搪乱
 4. SYR5/A に近い赤褐色細粒砂
 5. SYR4/A に近い赤褐色シルト
 6. 7SYR3/3 薄褐色シルト + 上層にSYR4/6 赤褐色細粒砂を含む
 7. 7SYR4/1 褐色シルト
 8. 7SYR3/4 薄褐色細粒砂
 9. 地山
- SK819 墓土

SD820



1. 造成土
 2. 7SYR2/2 黒褐色シルト + SYR5/B 明赤褐色砂ブロック微量を含む
 3. 7SYR3/2 黒褐色シルト
 4. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト地山
と10YR4/4 褐色シルトブロック ($\phi 2\sim3$ cm) が混ざる
 5. 10YR3/1 黑褐色シルト
 6. 10YR2/3 黑褐色シルト
 7. 地山
- SD820 墓土

SF806・SK807



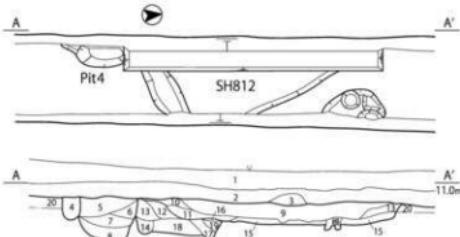
1. 造成土
 2. 根塊
 3. 7SYR3/2 黒褐色シルト + SYR5/B 明赤褐色砂ブロック微量を含む
 4. 7SYR2/3 種種褐色シルト～細粒粉砂
 5. 7SYR3/3 薄褐色シルト～細粒粉砂
 6. 7SYR2/2 黒褐色シルト～細粒粉砂
と7SYR3/3 薄褐色シルト～細粒粉砂が混ざる
 7. 7SYR4/4 褐色シルト～細粒粉砂
と7SYR3/3 薄褐色シルト～細粒粉砂が混ざる
 8. 7SYR3/4 薄褐色シルト～細粒粉砂
+ 7SYR4/6 細粒粉砂ブロック10% ($\phi 1\sim3$ cm) を含む
 9. 7SYR4/6 褐色シルト～細粒粉砂
+ 7SYR3/4 薄褐色シルト～細粒粉砂ブロック10% ($\phi 1\sim3$ cm) を含む
- SK807 墓土

10. 7SYR2/2 黒褐色シルト～細粒粉砂
 11. 7SYR5/6 明褐色シルト～細粒粉砂
+ 7SYR3/3 薄褐色シルト～細粒粉砂が斑状に含む
 12. 7SYR3/3 薄褐色シルト～細粒粉砂
+ 7SYR4/4 褐色シルト～細粒粉砂が斑状に含む
 13. 7SYR2/2 黒褐色シルト～細粒粉砂
 14. 7SYR2/2 黑褐色シルト～細粒粉砂 + 氯化物を含む
 15. 7SYR3/4 薄褐色シルト～細粒粉砂
と7SYR4/4 薄褐色シルト～細粒粉砂が混ざる
 16. 2SYR3/6 薄褐色シルト～細粒粉砂 [地山被熱害]
 17. 地山
- SF806 墓土

0 (1/50) 2m

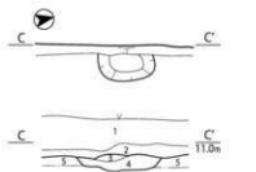
第10図 個別遺構図① (1:50)

SH812・Pit4



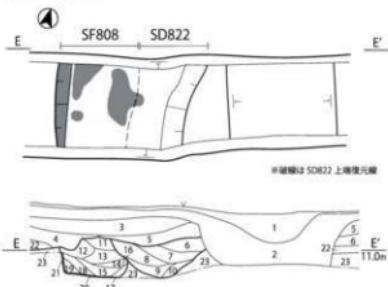
1. 流成土
2. 7SYR4/3 黑褐色シルト
3. 7SYR2/2 黑褐色シルト
4. 7SYR3/2 黑褐色シルト
5. 7SYR3/3 黑褐色シルト
6. 7SYR4/4 黑褐色シルト
7. 7SYR2/4 黑褐色シルト
8. 7SYR3/4 黑褐色シルト
9. 7SYR2/2 黑褐色シルト
10. 7SYR3/3 黑褐色シルト
11. 7SYR2/2 黑褐色シルト
12. 7SYR4/3 黑褐色シルト
13. 7SYR4/3 黑褐色シルト
14. 7SYR4/2 黑褐色シルト
15. 7SYR4/3 黑褐色シルト
16. 7SYR7/7 に近い黒褐色粘土
17. 7SYR4/4 黑褐色シルト
18. 7SYR2/2 黑褐色シルト
19. 7SYR4/3 黑褐色シルト
20. 地山

SK816

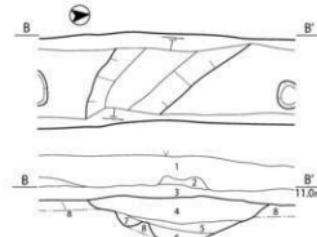


1. 流成土
2. 7SYR4/2 黑褐色シルト
3. 7SYR2/3 黑褐色シルト～細粒砂 (Blackish brown silty loam ~ fine granular sand)
4. 7SYR2/3 黑褐色シルト～細粒砂 (Blackish brown silty loam ~ fine granular sand) + 10YR5/6 黄褐色シルトブロックを10%含む (Contains 10% yellowish brown silty loam blocks)
5. 地山

SF808・SD822

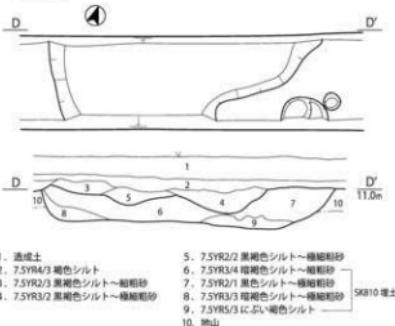


SD809



1. 流成土
2. 7SYR4/3 黑褐色シルト
3. 7SYR4/3 黑褐色シルト
4. 7SYR2/2 黑褐色シルト
5. 7SYR2/2 黑褐色シルト + 7SYR4/3 黑褐色シルトが40%混ざる
6. 7SYR4/2 黑褐色シルト
7. 7SYR3/3 黑褐色シルト + 地山ブロック20%含む
8. 地山

SK810



1. 流成土
2. 2SY9/2 黑褐色シルト (Blackish brown silty loam)
3. 2SY9/2 黑褐色シルト (Blackish brown silty loam)
4. 2SY9/2 黑褐色シルト (Blackish brown silty loam) + 7SYR3/3 黑褐色シルト～細粒砂 (Blackish brown silty loam ~ fine granular sand)
5. 7SYR2/2 黑褐色シルト (Blackish brown silty loam)
6. 7SYR2/1 黑褐色シルト～細粒砂 (Blackish brown silty loam ~ fine granular sand)
7. 7SYR2/1 黑褐色シルト～細粒砂 (Blackish brown silty loam ~ fine granular sand)
8. 7SYR3/3 黑褐色シルト～細粒砂 (Blackish brown silty loam ~ fine granular sand)
9. 7SYR5/3 に近い黒褐色シルト (Blackish brown silty loam near 7SYR5/3)
10. 地山

第11図 個別遺構図② (1:50)

SK803（第13図） 長軸1.0mの土坑で、平面の検出状況から円形になることが予想される。出土遺物は土師器片が4点のみである。時期は細片であることや摩耗により不明。

SF804（第13図） 縦軸長1.3m以上、横軸長0.8m以上の土師器焼成土坑である。平面形は検出状況から、北野遺跡¹⁾で確認されているような二等辺三角形になると考えられる。床面・壁面は強く被熱していることから、北壁が奥壁、西壁が側壁になるだろう²⁾。床面直上からは少量の炭化物が出土している。古代の土師器が2kg近く出土し、器種とし

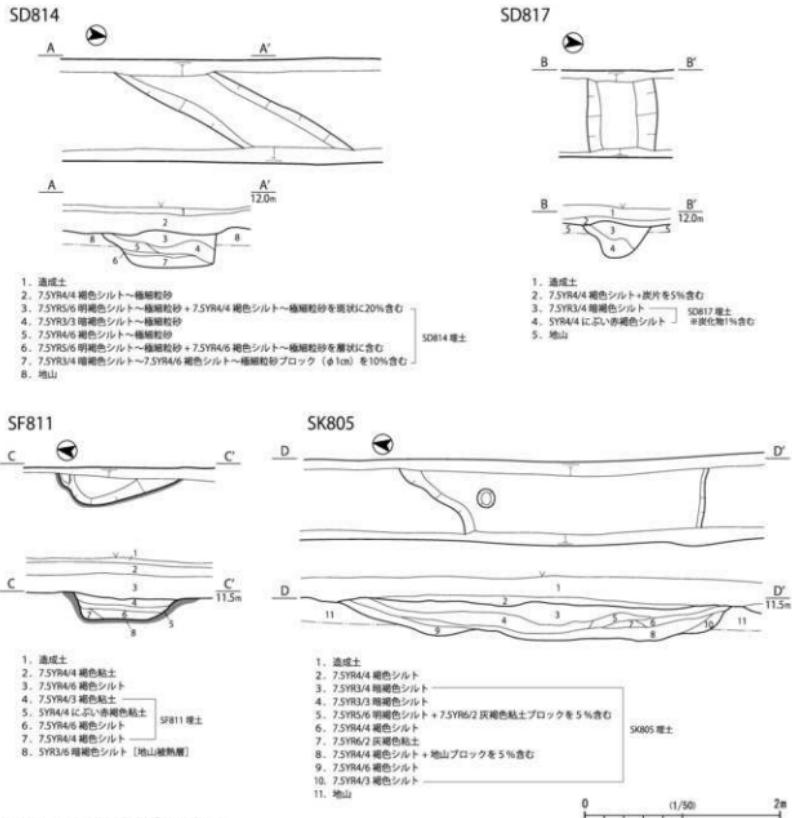
ては土師器の杯や壺、土鍤などがある。7世紀後半から8世紀初頭のものである（第18図）。

（2）古墳遺跡

古墳遺跡では、北から南にかけて順に遺構を報告する。

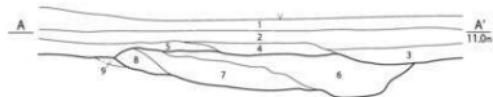
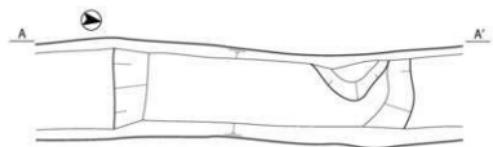
SD901（個別遺構図なし） 安養寺跡と古墳遺跡の境界付近で検出された遺構である。規模は長さ0.8m以上、幅1.1m、深さ0.1mの箱形状の溝である。遺構内からは古代の土師器が出土しているが、小片であることから図化は行なっていない。

SF902（第14図） 周辺より標高のやや高い地点



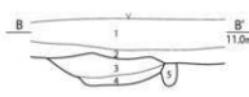
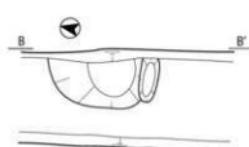
第12図 個別遺構図③ (1:50)

SK802



1. 造成土
 2. 7SYR4/3 褐色シルト + 7SYRS/6 明褐色シルトブロック5%を含む
 3. 7SYR3/3 褐色シルト + 7SYRS/4 にぶい褐色ブロックを含む
 4. 7SYR3/3 黒褐色シルト
 5. 7SYR4/4 褐色シルト + 7SYRS/6 シルト10%を含む
 6. 7SYR4/3 褐色シルト + 7SYRS/6 明褐色シルトブロック30%を含む
 7. 7SYR3/3 増褐色シルト【一部、樹木による腐食化か?】
 8. 7SYR4/2 黑褐色シルト【一部、樹木による腐食化か?】
 9. 地山
- SK802堆土

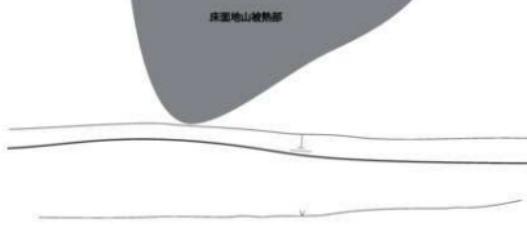
SK803



1. 造成土
 2. 7SYR4/3 褐色シルト
 3. 10YRS/6 黄褐色シルト + 地山ブロックを5%含む
 4. 7SYR3/4 明褐色シルト
 5. 7SYR3/1 黑褐色シルト [ビット堆土ガ]
- SK803 堆土

0 (1/50) 2m

SF804



1. 造成土
 2. 10YR4/3 褐色シルト
 3. 7SYR4/3 褐色シルト
 4. 7SYR3/3 にぶい褐色シルトと10YR5/6 棕褐色粉砂10%が混ざる
 5. 7SYR3/3 黑褐色細粒粉砂 + 砂土ブロック微量含む
 6. 7SYR4/4 増褐色細粒粉砂 + 砂土ブロック微量含む
 7. 10YR1/4 増褐色シルト + 下層に炭化物が層状に堆積する
 8. 7SYR4/2 増褐色シルト + SYR4/4 にぶい褐色細粒粉砂10%程度がまばらに堆積する [地山被熱層]
 9. 地山 [花崗岩風化層]
- SF804 堆土

0 (1/20) 1m

第13図 個別構造図④ (1:50, 1:20)

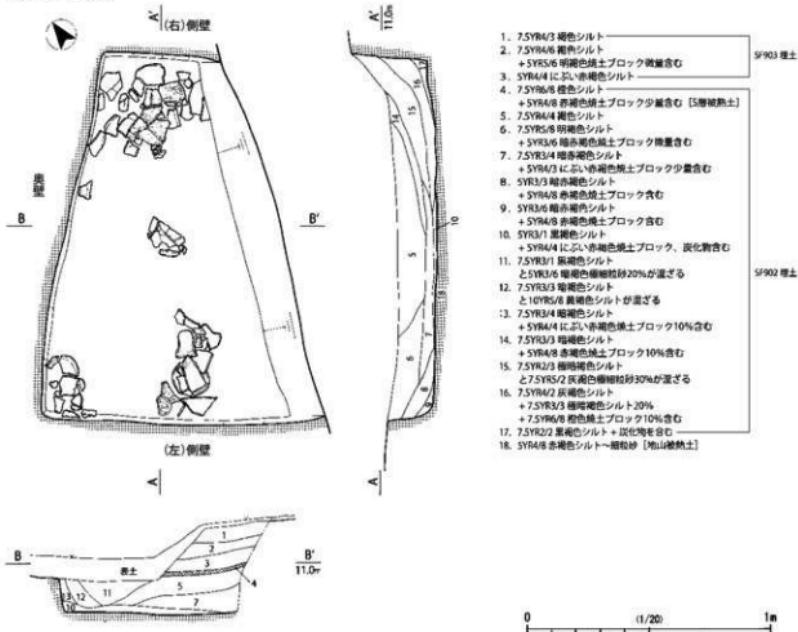
で確認された土師器焼成土坑である。奥壁から側壁にかけてと思われる一部と床面を検出した。規模は、奥壁が1.5m、(左)側壁が1.15m以上、(右)側壁が0.4m以上、深さ0.3mである。平面は、西にある奥壁側では幅が広く、側壁が東に集束しようとする関係から二等辺三角形をなすことが想定される。本体部分は地山を掘り込んで構築された素掘りの土坑である。ただし、出土遺物の中に黒斑がある粘土塊がいくつか確認された。厚さ1cm程度で、粗雑なつくりであることから土器等ではなく、構築部材の一部であった可能性が高い(写真図版12)。床面はほぼ水平で、床面から壁面にかけてはほぼ垂直に立ち上がる構造となっている。また、土師器焼成を行なっていた痕跡として、地山が強く被熱しているのが特徴である。

床面と壁面では、地山が強く被熱し、土色が明褐

色から赤褐色に変色していた。ほぼ均一に4cm厚程度で強い被熱痕が確認されるが、床面から壁面の立ち上がり部分では被熱状況が弱く、薄いもしくは無いという検出状況である。これは、後述するように薪材が立ち上がり部に置かれていたことに起因すると考えられ、薪材によって焼成時の熱が逃げている可能性がある。

焼成に使用されたと考えられる薪材は、床面から壁面への立ち上がり部分に置かれ、かつ、壁面に沿うようにして並べられていた。薪材の残存状態は径1~2cm程度で、幹というよりは小枝のようなものであったと考えられる。土師器焼成土坑の燃焼材については、樹種同定の結果が全てクヌギであったことが判明した。また、床面直上から土壤を採取し、プランツオパール分析を行った結果、ウシクサ属を中心に珪酸体が確認された。土師器の焼成にあたっ

SF902・SF903



第14図 個別遺構図⑤(1:20)

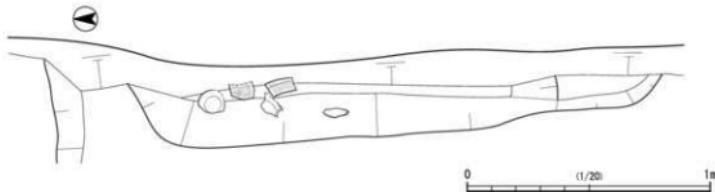
ては木材燃料とともに、ウシクサを使用していた可能性がある。

遺物は土師器の皿、杯、鍋、壺、瓶が各層から出土した（第20図）。特に、8・9・10・16・17層からは土師器が重なり合うように集中して出土した。床面直上で出土した土師器の皿・杯は完形に近いもののが多かった。それ以外の層では、雑然としており、同一個体の破片が散在している状況である。すなわち、8・9・10・16・17層で出土した土師器は焼成時の不良品等で、その場に放置もしくはその時に投棄されたものと考えられる。また、それ以外

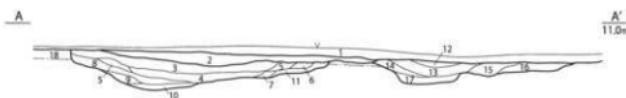
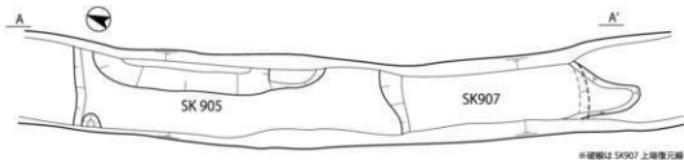
の層では堆積状況からみても、8・9・10・16・17層が堆積した後に投棄されたものと考えられる。土師器の年代は两者とも8世紀前半にまとまるところから、土師器焼成土坑の最終焼成から埋没までの時間は短かったといえる。いずれにせよ、SF902内からはコンテナ3箱近くの土師器が出土していることから成功品を含めればかなりの土師器が焼成されていたと考えられる。

SF903（第14図） SF902を調査中に確認した土師器焼成土坑である。床面の一部を検出した。遺構の大半は現況の造成により削平されたと考えら

SK905 遺物出土状況図



SK905・906・907



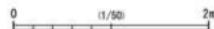
1. 焼成土
2. 7.SYR4/4 褐色シルト [SK906 墓土≠壁面のみ]
3. 7.SYR4/4 褐色シルト
4. 7.SYR5/3 にぶい褐色シルト
+ 7.SYR2/2 褐褐色粘土ブロックを40%含む
5. 7.SYR6/2 褐褐色粘土
6. 7.SYR5/4 にぶい褐色シルト
7. 7.SYR4/4 褐色シルト
8. 7.SYR4/4 褐色シルト
9. 7.SYR4/4 褐色シルト
+ 壁片、地土ブロックを70%含む
10. 7.SYR5/4 にぶい褐色シルト
+ 7.SYR4/3 褐色シルトブロックを40%含む
11. 7.SYR4/4 褐色シルト

SK905 墓土

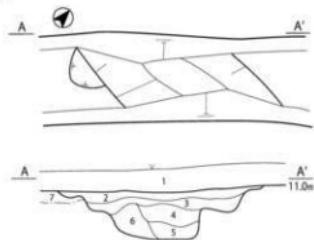
12. 7.SYR4/4 褐色シルト
13. 7.SYR4/3 褐色シルト
+ 粗粒砂が2%未満混じる
14. 7.SYR3/4 褐褐色シルト
+ 壁片20% + 烧土ブロックを1%含む
15. 7.SYR4/4 褐色シルト
16. 7.SYR4/4 褐色シルト
17. 7.SYR4/4 褐色シルト
18. 塙山

SK907 墓土

第15図 個別遺構図⑥ (1:20, 1:50)



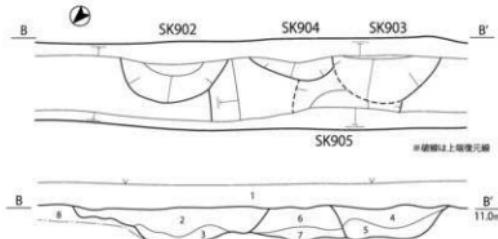
SD901



1. 造成土
2. 10YR2/3 黒褐色シルト～細粒粉砂 + 10YR4/6 褐色シルト～細粒粉砂ブロック3%を含む
3. 10YR2/2 黒褐色シルト～細粒粉砂 + 10YR4/6 褐色シルト1%～3%を含む
4. 10YR3/3 黑褐色シルト～細粒粉砂 + 10YR4/6 褐色シルト～細粒粉砂 + 10YR4/6 褐色シルトブロック5%を含む
5. 10YR3/2 黑褐色シルト～細粒粉砂 + 10YR4/6 褐色シルトが混ざる
6. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒粉砂 + 10YR4/6 褐色シルトが層状に7%～10%を含む [根根乱れ]

SD901 墓土

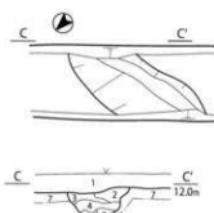
SK902・903・904・905



1. 造成土
2. 10YR3/4 黑褐色シルト～細粒粉砂 + 10YR4/6 褐色シルト～細粒粉砂ブロック3%～10%を含む
3. 10YR3/4 黑褐色シルト～細粒粉砂 + 10YR4/6 褐色シルトブロック5%～10%を含む
4. 10YR3/4 黑褐色シルト～細粒粉砂
5. 10YR3/4 黑褐色シルト～細粒粉砂 + 10YR4/6 褐色シルト～細粒粉砂ブロック3%～5%を含む
6. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒粉砂 + 10YR4/6 褐色シルト～細粒粉砂ブロック3%を含む
7. 10YR3/3 黑褐色シルト～細粒粉砂 + 10YR4/6 褐色シルトブロック3%を含む
8. 地山

*破線は上塗後元線

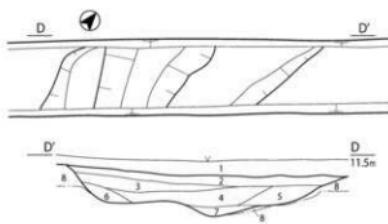
SD907



1. 造成土
2. 10YR2/3 黑褐色シルト～細粒粉砂
3. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒粉砂
4. 2.5Y4/1 黄褐色シルト
5. 10YR2/2 黑褐色シルト～細粒粉砂
6. 10YR3/3 黑褐色シルト～細粒粉砂
7. 地山

SD907 墓土

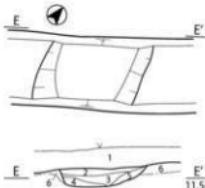
SD908



1. 造成土
2. 7.5YR2/2 黑褐色シルト + φ2mm～1cm角隕10%が混ざる
3. 7.5YR2/3 種粗褐色シルト + 10YR4/4 褐色シルトブロック (φ3～5cm) 少量混ざる
4. 7.5YR2/3 種粗褐色シルト
5. 7.5YR4/4 褐色シルト
6. 7.5YR4/1 褐色シルト
7. 10YR3/4 黑褐色シルト
8. 地山

SD908 墓土

SD909



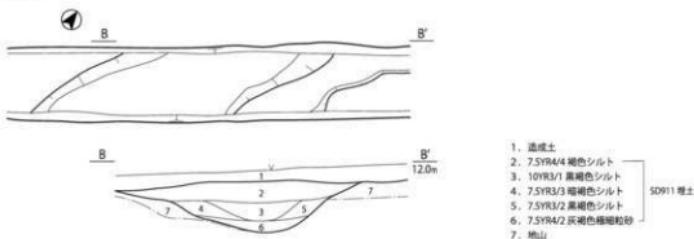
1. 造成土
2. 7.5YR3/2 黑褐色シルト
3. 7.5YR3/1 黑褐色シルト
4. 7.5YR3/4 種粗褐色シルト
5. 7.5YR2/2 黑褐色堆積物粉砂
6. 地山

SD909 墓土

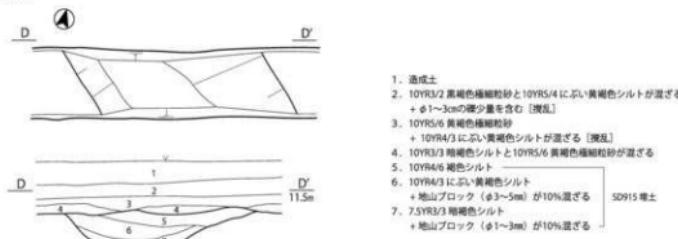
0 (1/50) 2m

第16図 個別遺構図⑦ (1:50)

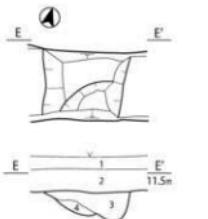
SD911



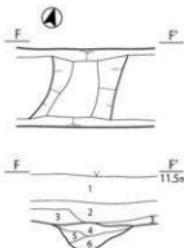
SD915



SD916



SD917



第17図 個別造構図⑧ (1:50)

れる。SF902の5層上層が被熱している。被熱が弱く、埋土より出土した土師器の時期や器種がSF902と類似していることから、SF902を利用した二次焼成とも考えられる。土師器は多く出土したが、小片であることから図化は行っていない。

SK905(第15図) 規模は、長軸2.15m、短軸0.3m、深さ0.3mの土坑である。出土遺物は、土師器の椀が7割近い残存状態で確認されたほか、壺や瓶の大

片が出土した。時期は8世紀前半から中頃である。

SK906(第15図) 規模は、長軸2.8m、深さ0.05mの浅広な土坑である。SK905との切り合い関係から、SK905廃絶後に構築された遺構である。小片の土師器が数多く出土し、杯や椀、壺のほか広口筒形なども確認されている。付近は住宅造成による土取りが行われたとされる場所で本来の遺構面は現在より高かったと考えられ、遺構の深さはより深く、廃棄土坑のようなものであったとも考えられる。時期は、8世紀中頃である。

SK907(第15図) 規模は、長軸2.1m、短軸0.7m、深さ0.25mの土坑である。切り合いからSK906に先行する遺構であることがわかる。遺構内からは土師器の高杯、壺が出土しており、8世紀前半から中頃である。

(3) 北野遺跡

北野遺跡では、東から西へかけて順に遺構を報告する。

SD901(第16図) 長さ0.8m以上、幅1.2m、深さ0.5mの断面箱形の溝である。溝中からは8世紀前半から中頃の土師器が出土している(第21図)。

SK902・903・904・905(第16図) 集中的に4基の土坑が切り合っている。以下、各土坑の規模や性格について列記する。SK902は長軸2.0m、短軸0.4m以上、深さ0.4m。SK903は長軸0.9m、短軸0.2m、深さ0.4m。SK904は長軸1.1m、短軸0.5m、深さ0.3m。SK905は、長軸1.1m、短軸0.4m、深さ0.2m。遺物はSK902およびSK903から古代の土師器片が数点出土しているのみである。平面形状は不整形で遺物の量が少ないため、土師器を製作するための土探しの痕跡の可能性が高い。

SD906(個別遺構図なし) 長さ0.55m以上、幅0.5m、深さ0.1mの断面箱形の浅い溝である。溝中

からは古代の土師器が出土しているが、小片であることから図化しなかった。

SD907(第16図) 長さ1.0m以上、幅0.6m、深さ0.3mの断面V字状の溝である。遺物は確認されなかった。

SD908(第16図) 長さ0.9m以上、幅2.2m、深さ0.4mの幅広の溝である。遺物は確認されなかった。

SD909(第16図) 長さ0.6m以上、幅1.1m、深さ0.2mの断面箱形形状の浅い溝である。古代の須恵器が1点出土しているが、小片であることから図化は行なっていない。

SK910(個別遺構図なし) 長軸3.0m、短軸0.7m、深さ0.25mの土坑である。遺物は確認されていない。

SD911(第16図) 長さ1.2m以上、幅1.3m、0.55mの断面V字に近い形状の溝で、調査区を斜行している。遺物は確認されていない。

SK912・913(個別遺構図なし) 切り合っている2基の土坑である。SK913削平後にSK912が構築されている。SK913からは古代の土師器が出土している。

SD915(第17図) 長さ0.8m以上、幅2.0m、深さ0.4mの断面箱形の溝である。遺物は確認されなかった。

SD916(第17図) 長さ0.7m以上、幅0.9m、深さ0.3mの溝である。遺物は出土しなかった。

SD917(第17図) 長さ0.7m以上、幅0.7m、深さ0.3mの溝である。遺物は出土しなかった。

註

1) 北野遺跡で確認されている土師器焼成土坑は、二等辺三角形で各頂点部分は丸みを帯びている。時期により規模が違うことも指摘されている。

2) 土師器焼成土坑の名称については、新潟研究会1997「古代の土師器生産と焼成遺構」真陽社を参考にした。

第1表 安養寺跡第8次調査遺構一覧表

遺構名	図版	種別	規模(m)	深さ(m)	主な出土遺物	時期	備考
S8001	第7図	溝	1.0×0.6	0.15	土師器	古代	箱形
SK802	第7図	土坑	3.1×0.7	0.5	土師器(杯、鍋)	中世	
SK803	第7図	土坑	1.0×0.5	0.3	土師器	古代	
SF804	第7図	土師器焼成土坑	1.3×0.8	0.2	土師器(杯、甕、土鍤)	7世紀後半～8世紀初頭	
SK805	第6図	土坑	3.2×0.6	0.4	土師器(皿、杯、蓋、甕)	古代	
SF806	第5図	土師器焼成土坑	1.2	0.3	土師器(皿、杯、甕、鍋)	7世紀後半～8世紀初頭	遺物少。小片 SF806 → SK807
SK807	第5図	土坑	1.3×0.3	0.4	土師器(皿、杯、甕、鍋、瓶)	7世紀後半～8世紀初頭	遺物多 SF806 → SK807
SF808	第6図	土師器焼成土坑	1.0×0.8	0.4	土師器甕もしくは鍋	7世紀後半～8世紀初頭	遺物少 SF808 → SF822
SD809	第5図	溝	1.2×0.8	0.5	土師器(皿、杯、碗、甕)	8世紀中頃	箱形
SK810	第5図	土坑	2.8×0.8	0.4	土師器(皿、甕)	8世紀代	遺物少
SF811	第6図	土師器焼成土坑	1.2×0.3	0.2	土師器	古代	
SK812	第5図	堅穴埋物	2.3×1.1	0.2	なし	不明	転床
SD813	第6図	溝	0.7×0.4	0.3	土師器	古代	箱形
SK814	第6図	溝	1.6×0.5	0.4	土師器(杯)	8世紀前半	箱形
SK816	第5図	土坑	0.6×0.3	0.15	土師器(皿、杯、甕)、須恵器	8世紀中頃	
SD817	第6図	溝	0.8×0.7	0.4	土師器(皿、杯、甕)	8世紀前半～中頃	V字形
SD818	第5図	溝	0.7×0.8	0.2	土師器(甕)	7世紀後半～8世紀初頭	箱形
SK819	第5図	土坑	1.1×0.2	0.3	土師器	古代	SK821 → SK819
SD820	第5図	溝	0.6×2.6	0.5	土師器	古代	V字形
SK821	第5図	土坑	1.0×0.5	0.3	なし	不明	SK821 → SK819
SD822	第6図	溝	1.0×0.8	0.4	なし	不明	V字形 SF808 → SF822

第2表 古堀遺跡第9次調査遺構一覧表

遺構名	図版	種別	規模(m)	深さ(m)	主な出土遺物	時期	備考
SD901	第7図	溝	0.8×1.1	0.1	土師器	古代	箱形
SF902	第7図	土師器焼成土坑	1.5×1.15	0.3	土師器(皿、杯、高杯、甕、鍋、広口筒形)	8世紀前半	SF902 → SF903
SF903	第7図	土師器焼成土坑	0.35	0.2	土師器(皿、杯、甕)	8世紀前半	SF902 → SF903
SK905	第7図	土坑	2.15×0.3	0.3	土師器(碗、高杯、甕、鍋、広口筒形)	8世紀前半～中頃	遺物多
SK906	第8図	土坑	2.8	0.05	土師器(杯、碗、甕、鍋、広口筒形)	8世紀中頃	遺物多
SK907	第8図	土坑	2.1×0.7	0.25	土師器(高杯、甕)	8世紀前半～中頃	

第3表 北野遺跡第9次調査遺構一覧表

遺構名	図版	種別	規模(m)	深さ(m)	主な出土遺物	時期	備考
SD901	第9図	溝	0.8×1.2	0.5	土師器	8世紀前半～中頃	箱形
SK902	第9図	土坑	2.0×0.4	0.4	土師器(甕ほか)	古代	
SK903	第9図	土坑	0.9×0.2	0.4	土師器	古代	
SK904	第9図	土坑	1.1×0.5	0.3	なし	不明	
SK905	第9図	土坑	1.1×0.4	0.2	なし	不明	
SD906	第9図	溝	0.55×0.5	0.1	土師器	古代	箱形
SD907	第9図	溝	1.0×0.6	0.3	なし	不明	V字形
SD908	第9図	溝	0.9×2.2	0.4	なし	不明	箱形
SD909	第9図	溝	0.6×1.1	0.2	須恵器	古代	箱形
SK910	第9図	土坑	3.0×0.7	0.25	なし	不明	
SK911	第9図	溝	1.2×1.3	0.55	なし	不明	V字形
SK912	第9図	土坑	3.1×0.6	0.25	なし	不明	
SK913	第9図	土坑	0.8×0.4	0.1	土師器	古代	
SD915	第9図	溝	0.8×2.0	0.4	なし	不明	箱形
SD916	第9図	溝	0.7×0.9	0.3	なし	不明	
SK917	第9図	溝	0.7×0.7	0.3	なし	不明	V字形

※調査区外へ続くため、規模については確認できる実数、深さについては代表的な数値で示した。

※図版は、本書の平面図番号に対応する。

※安養寺跡の遺構番号815、古堀遺跡の遺構番号904、北野遺跡の遺構番号914は欠番。

第4節 遺物

(1) 出土遺物の概要

安養寺跡第8次、古堀遺跡第9次、北野遺跡第9次の出土遺物は土師器・須恵器で、総量はコンテナ換算で13箱、29.87kg（整理前）である。

遺物の時期は、7世紀後半から8世紀中頃にかけてのものがほとんどで、ごくわずかに中世を含む。遺物編年と杯・皿・碗の分類は明和町斎宮跡における土師器編年（斎宮歴史博物館2001）を主に用いた¹⁾。時期区分は下記を参照されたい。

・斎宮第1期第1段階

7世紀後半～8世紀初頭

・斎宮第1期第2段階～斎宮第1期 第3段階

8世紀前半～8世紀中頃

・斎宮第1期第4段階～斎宮第2期 第1段階

8世紀後半から9世紀初頭

遺物が細片で詳細な時期がつかみにくいものなどは古代や中世という表現にしている。ここでは、古代を7世紀中頃から11世紀前半とし、中世を11世紀後半から16世紀末とした。

土師器の分類は下記を参照されたい²⁾。

杯A：高台を持たない平底の杯である。底部と体部の境目は明瞭に屈曲し、大きく立ち上がる。また、口縁端部は丸くおさまる。内面には暗文を施す。

杯C：器形は小さな平底もしくは緩やかな丸底で、明瞭ではない底部から口縁部への立ち上がりである。口縁端部は杯Aと比べ、丸より三角に近い形状をしている。

杯G：器形は碗に近く、丸い底部から体部にかけて大きく内側しながら立ち上がる。口縁部は垂直もしくはやや外反するものが多い。粘土紐の積み上げ痕跡を残したままのものみられ、砂粒が多いなど成形が粗雑である。暗文は施さない。

皿A：高台を持たない皿である。器形は平らな底部から口縁部にかけて丸みを持ちながら、垂直もしくはやや外反しながら立ち上がる。内面に暗文を施すものも多い。

(2) 安養寺跡出土遺物

SF804（第18図） 1～3は7世紀後半から8世紀初頭の土師器壺である。1は全体的に磨耗が激しいが、内外面とも強くハケ目が残る。2は体部から口縁部にかけて「く」の字状に外反する。3は外面の調整痕跡が明瞭に残存し、内面に工具によるケズリ痕跡が下から上に向かって施される。また、破断面には、粘土紐の継目が明瞭にあることから焼成時に割れやすい状況にあったといえる。4は土鍤。長さ3.8cm、重さ4.76gと小型である。

SF808（第18図） 5・6は土師器の壺もしくは鍋である。5は頸部の肥厚が目立つ。いずれも、7世紀後半から8世紀初頭に比定される。

SF806（第18図） 7は土師器の壺である。内面のケズリは下から上に複数回に分けて施される。

SK807（第19図） 8から12は土師器である。

8は杯Gである。器形は口縁部から底部にかけて、丸みを帯びる。調整は外面に粘土紐の積み上げ痕跡が明瞭に残り、胎土に径2mm程度の長石を含む。

9から11は壺である。9は破断面より粘土紐の積み上げ痕跡が確認できる。10はほぼ完形である。外面はハケ後に頸部を強いユビオサエによって成形される。内面体部はハラケズリが施され、右回りの下部と左回りの上部で逆方向に調整される。調整はいずれも比較的明瞭に残り、二次焼成の痕跡がない。11は破損が一部あるもののほぼ完形で、球体状になっている。内外面はハケやケズリ痕跡が明瞭に残る。外面には、被熱痕がないことから煮沸具として使用された痕跡はない。

12は長胴壺である。外面口縁部のヨコナデは、ハケ目をすり消している。内面はハケを施し、後に下から上にかけてケズリ調整を工具で行なっている。口縁部には粘土紐の積み上げ痕跡が残る。いずれも、7世紀後半から8世紀初頭の年代が与えられる。

SK802（第19図） 13は南伊勢系の土師器鍋である。時期は中世。

14は土師器の杯Aである。外面底部にはハラケズリを行なった痕跡がある。8世紀前半から8世紀中頃である。

SK810 (第19図) 15は8世紀代の土師器甕である。

SK816 (第19図) 16・17は土師器の杯Aである。調整は、外面底部のヘラケズリ以外をナデによって施される。

SD814 (第19図) 18は土師器の杯Gである。器形は底部から口縁部にかけて丸みを帯びる。体部中央には、粘土組の積み上げ痕跡が明瞭に残る。粘土組は痕跡から左回りに積み上げられたと考えられる。成形は粗雑で、胎土には長石が多く残る。8世紀前半と考えられる。

SD817 (第19図) 19から22は土師器である。

19・20は杯Aである。19は内面をヨコナデ、外顔をナデ調整によって施される。20の外面底部と体部調整は、ヘラケズリを一定方向に行っている。

21は皿Aである。外面底部をヘラケズリによって、長さ約4cm単位で施される。暗文は施されない。

22は甕である。磨滅が激しい。内外顔の体部にはハケが施される。いずれも8世紀前半から中頃と考えられる。

SD818 (第19図) 23・24は土師器の甕である。いずれも、口縁部にはヨコナデが施され、ハケ目をナデ消している。

Pit4 (第19図) 25は土師器の甕である。小片

で磨滅が激しいが、ヨコナデ痕跡を確認できる。

Pit7 (第19図) 26は土師器の甕である。小片で磨滅が激しい。

包含層 (第19図) 27は土師器の甕もしくは鍋の把手部である。ハケ目が明瞭に残存する。把手部や粘土の繋ぎ目は1cmから2cm単位で細く削った痕跡が確認できる。

28は陶器の皿。

29は須恵器の杯。

30は筒形広口土器である。全体的に摩耗しているが、口縁部の内外顔に幅2mmから5mmの直線的な赤彩が塗られる。口縁部外面はヨコナデが施され、体部にはハケが施される。

(3) 古墳遺跡出土遺物

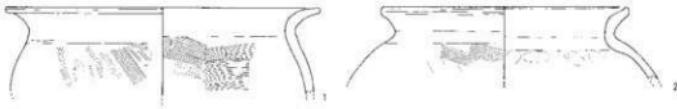
SF902 (第20図) 31から45は8世紀前半から8世紀中頃の土師器である。

31・32は杯A。外面底部はユビオサエ、それ以外の調整はナデもしくはヨコナデによって施される。

33から36は皿A。平らな底部から口縁部にかけてはやや外反しながら立ち上がる。調整はいずれも外面底部にヘラケズリが右回りに施される。36は内面底部に暗文が二重に施される。

37は高壺の杯部分。杯底部から脚部は剥離している。調整としては、内面はヨコナデが施され、外

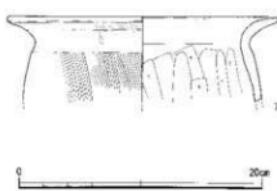
SF804(1~4)



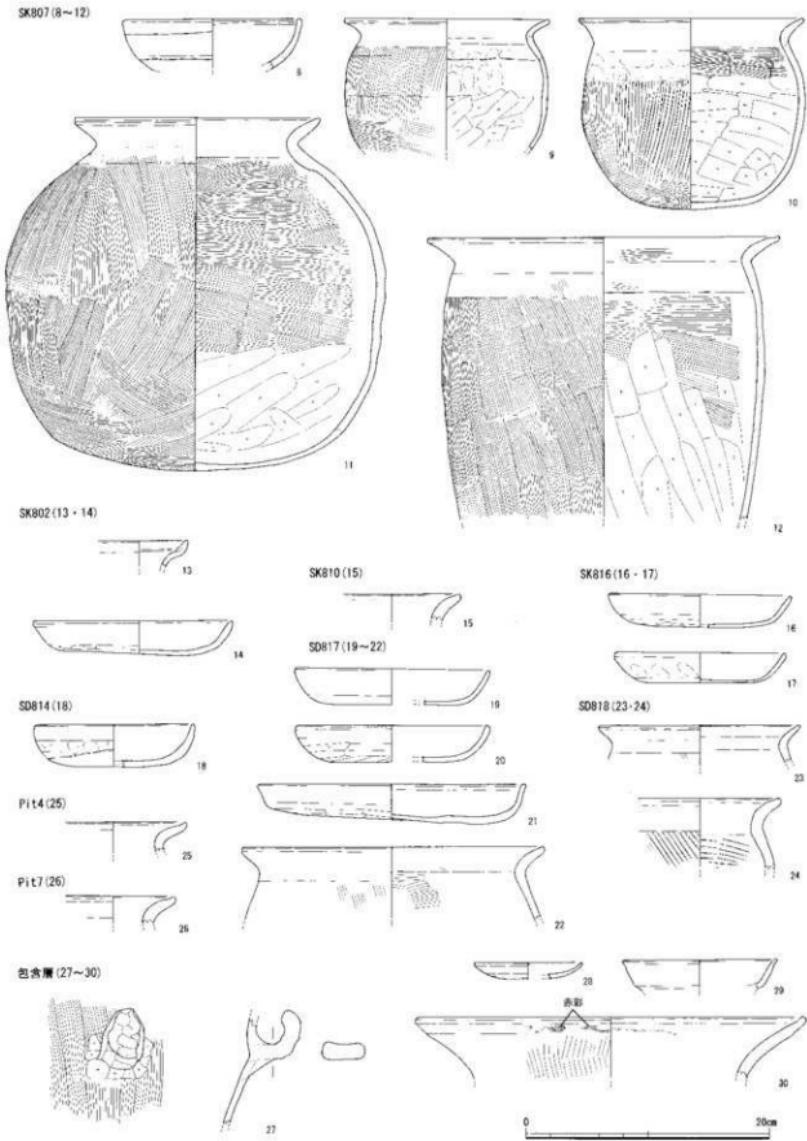
SF808(5・6)



SF806(7)

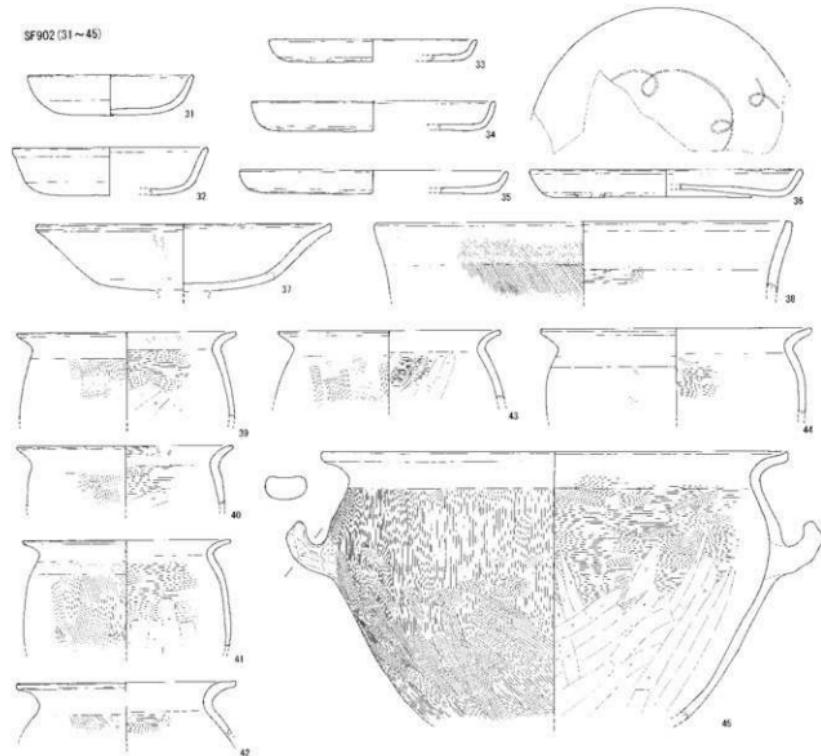


第18図 安養寺跡出土遺物実測図① (1:4)

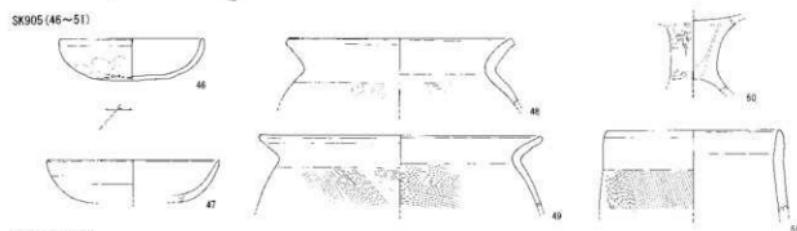


第19図 安養寺跡出土遺物実測図② (1:4)

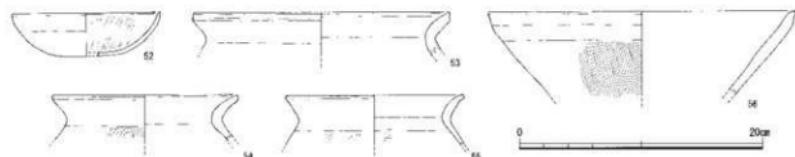
SF902 (31~45)



SK905 (46~51)



SK906 (52~56)



第20図 古墳遺跡出土遺物実測図 (1:4)

面底部にはミガキの痕跡がわずかに残存する。

38は瓶の口縁部分。

39から45は甕である。39から43の口径は17cm前後、44は22cmに対し、45の把手付甕は38cmと大きめである。内面の調整は、体部下部がヘラケズリ、体部から口縁部にかけてはハケが施される。ヘラケズリは下から上に削りとる。外面は体部がハケ、口縁部がハケのちヨコナデによって調整される。45の把手は、破断面の粘土紐痕跡から甕の体部を粘土紐で積み上げる段階に重ねられたものと考えられる。この把手は、細かいヘラケズリ作業によって、成形されている。外面全体は土師器焼成時の段階時に色調が灰色気味に変色したものとみられる。

SK905（第20図） 46から51は8世紀前半から中頃の土師器である。

46・47は杯C。器形は平らな底部をもたず、丸みを帯びて、口縁部まで立ち上がる。46は外面底部と体部にナデ後のユビオサエ痕跡が残り、底部には文字もしくは記号のような線刻がみられる。

48・49は甕。内外面の体部と口縁部はハケのちに口縁部のみヨコナデの調整である。

50は高杯の脚部。

51は筒形の口縁部である。器形は垂直に立ち上がっている。内面はヨコナデが施される。外面は体部から口縁部にかけてハケ調整を行なったのち、口縁部をヨコナデによって施される。

SK906（第20図） 52から56は8世紀中頃の土師器である。

52は杯C。器形は丸みを帯びた底部から口縁部にかけて内側するように立ち上がる。外面はオサエ

のちにナデによって調整され、内面にはミガキが施される。

53から55は甕。52は、内面をナデ調整後に放射線状にミガキを施している。また、外面の底部には直線方向の線刻が2条入る。53は、破断面から粘土の継ぎ足しが確認できる。

56は広口筒形の口縁部である。56は体部から口縁部にかけて口が広くなっているのが特徴である。外面はハケ調整後にナデが口縁部に施されるが、内面は剥離していることから調整不明である。

（4）北野遺跡出土遺物

Pit3（第21図） 57は土師器の杯A。口縁部の外表面はヨコナデ調整され、外反する。11世紀代である。

SD901（第21図） 58・59は土師器の甕。2点とも摩滅が激しいが、口縁端部が上方に若干つまみあげられ、頸部で肥厚している形状から8世紀代と考えられる。

註

1) 土師器焼成土坑は、その立地性から斎宮や伊勢神宮に供給された可能性を上村（1997）や德橋（2013）によって指摘されている。よって、今回の報告書では、斎宮出土の土器を集成した『斎宮跡発掘調査報告』内院地区的調査本文編』を基本とした。また、他の時期の遺物との統一性や飛鳥時代の遺物には『古代の土器I 都城の土器集成』を一部参考にしているため、この報告書では世纪表記を行った。

2) 土師器の分類は、基本を『斎宮跡発掘調査報告I 内院地区の調査 本文編』としたが、『古代の土器I 都城の土器集成』を一部併用している。

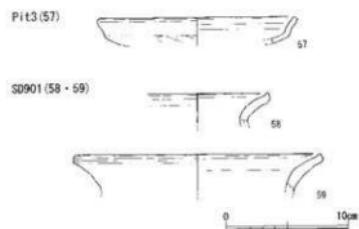
参考文献

上村安生 1997 「各地域の土師器生産と土師器焼成遺構 東海－三重県を中心として－」『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社

古代の土器研究会 1992 『古代の土器集成I 都城の土器』

斎宮歴史博物館 2001 『斎宮跡発掘調査報告I 内院地区的調査本文編』

徳橋裕昌 2013 『伊勢神宮の考古学』雄山閣



第21図 北野遺跡出土遺物実測図（1:4）

第4表 安養寺跡第8次・古堀遺跡第9次・北野遺跡第9次調査出土遺物一覧表①

【凡例】

※実測図版・写真図版中の各遺物の番号と対応する。

※実測番号は実測図版時に各遺物の実測図に付与した整理番号である。

※地土の色調は『新版 精選土色名』による。

※土師器・陶器等の残存度については、復元される目録がないし底部を12分割したうちの残存度を示している。「小片」としたものは、罐片のため残存度が示せなかつたものである。

No.	実測番号	種類	基積	遺物	部位 残存度	法量 (m³)	基盤調査 (法量などの特徴)			施主	構成	色調 (墨書き)	特記事項				
							口径	高さ	その他								
1	007-01	土師器	甕	SH004	1/12	—	—	—	内:ハケメ・ヨコナダ 外:ハマチメ	やや密	やや不良	緑2,5086.6	安養寺跡 (8.0)				
2	008-02	土師器	甕	SH004	2/12	20.0	—	—	内:ナカ・ユビオサエ・ヨコナダ 外:タテハケ (うすい)	やや密	やや良	紅5.5-黄緑10987.3	安養寺跡 (8.0)				
3	007-03	土師器	甕	SH004	1/12	—	—	—	内:エタゲリ・ヨコナダ 外:ハマメ	やや密	良	紅5.5-黄緑10987.4	安養寺跡 (8.0)				
4	007-05	土師器	上槽	SH004	—	3.8/1.1	—	8.4(孔径) 底5.5 4.7mg	内:ナダ	やや密	良	紅5.5-黄緑10987.2	安養寺跡 (8.0)				
5	007-03	土師器	甕	SH004	1/12	—	—	—	内:ナダ・ハケメ・ヨコナダ	やや密	やや良	紅5.5-黄緑10987.4	安養寺跡 (8.0)				
6	008-03	土師器	甕	SH004	2/12	17.0	—	—	内:ハケメ・ヨコナダ	やや密	やや不良	淡黄2,5108.3	安養寺跡 (8.0)				
7	008-01	土師器	甕	SH004	1/12	22.0	—	—	内:エタゲリ・ヨコナダ 外:ハマメ	やや密	やや不良	紅5.5-黄緑10987.4	安養寺跡 (8.0)				
8	006-03	土師器	瓶	SH007	3/12	14.6	—	—	内:ヨコナダ 外:ナガオサエ	密	良	紅5.5-黄緑7,5107.4	安養寺跡 (8.0)				
9	006-04	土師器	甕	SH007	2/12	16.6	—	—	内:エタゲリナダ・タケリ 外:ヨコナダ 内:タケリ・ヨコナハ	密	やや良	紅5.5-黄緑10987.4	安養寺跡 (8.0)				
10	006-01	土師器	甕	SH007	6/6	16.4	15.7	—	内:ハケメ・底面タケリ無 外:ヨコナダ 外:ハマメハケメ後ナダユ ビ	やや密	良	紅5.5-黄緑7,1097.4	安養寺跡 (8.0)				
11	003-01	土師器	甕	SH007	口径: 12.12 奥深さ: 12.12 底直径: 16.3	19.9 12.0 16.3	29.1	—	内:ケズリ・ハケメ・ヨコナ ダ 外:ハケメ	密	良	浅黄緑10108.4	安養寺跡 (8.0)				
12	004-01	土師器	瓦脚置	SH007	1/12	28.6	—	—	内:ハケ後ナダリ・ナダ・ヨ コナダ 外:開口ヨコナダ・ハケリ	密	良	内:瓦脚7,10987.4 外:瓦脚7,10987.4 柄10105.1	安養寺跡 (8.0)				
13	007-04	土師器	甕	SH002	小片	—	—	内:ヨコナダ	やや密	やや良	紅5.5-黄緑10987.3	安養寺跡 (8.0)					
14	006-02	土師器	杯	SH002	6/12	16.3	2.9	—	内:ナダ・ヨコナダ 外:ハマチメ	やや密	良	緑10108.0	安養寺跡 (8.0)				
15	001-04	土師器	甕	SH010	小片	—	—	内:ヨコナダ	密	やや良	緑7,5106.6	安養寺跡 (8.0)					
16	005-05	土師器	瓶	SH010	1/12	14.8	2.7	—	内:ナダ・ヨコナダ 外:ナガオサエ・ナダ	密	やや良	緑10107.9	安養寺跡 (8.0)				
17	005-06	土師器	瓶	SH010	2/12	15.7	2.5	—	内:ナダ 外:ナガオサエ	密	不良	浅黄緑10108.0	安養寺跡 (8.0)				
18	001-03	土師器	瓶	SH014	4/12	7.0	3.5	—	内:ナダ・ヨコナダ 外:ヨコナダ	密	良	明黄緑10108.7.2	安養寺跡 (8.0)				
19	005-03	土師器	瓶	SH017	1/12	18.7	2.95	—	内:ヨコナダ 外:ナダ	密	やや不良	緑10107.6	安養寺跡 (8.0)				
20	005-02	土師器	瓶	SH017	3/12	15.5	3.0	—	内:ナダ・ヨコナダ 外:ハマケメリ一定方向	密	やや良	緑10107.6	安養寺跡 (8.0)				
21	005-01	土師器	瓶	SH017	5/12	21.7	3.3	—	内:ナダ・ヨコナダ 外:ハマチメ・ナダ	密	良	緑10107.6	安養寺跡 (8.0)				
22	003-04	土師器	甕 (長)	SH017	1/12	24.6	—	—	内:ハケリ・ヨコナダ 外:ハマメ	密	やや不良	浅黄緑10108.4	安養寺跡 (8.0)				
23	001-02	土師器	甕	SH018	口径: 12.12 奥深さ: 16.4 底直径: 14.3	19.9 12.0 14.3	—	—	内:エタゲリ・ヨコナダ 外:ハマチメ	密	やや良	紅5.5-黄緑10986.4	安養寺跡 (8.0)				
24	001-01	土師器	甕	SH018	小片	—	—	—	内:ハケメヨコナダ 外:ハマチメナダ	密	良	浅黄緑10108.4	安養寺跡 (8.0)				
25	001-06	土師器	甕	F11	小片	—	—	内:ヨコナダ	密	良	紅5.5-黄緑10987.4	安養寺跡 (8.0)					
26	001-05	土師器	甕	F11	小片	—	—	内:ヨコナダ	密	やや良	紅5.5-黄緑10987.4	安養寺跡 (8.0)					
27	002-02	土師器	瓶	拂土	—	—	—	内:ナダ・オサエ 外:ナガオサエ・ナダ 内:タケリ・ナダ	密	良	紅5.5-黄緑10987.6.4	安養寺跡 (8.0)					
28	001-07	陶器	器	灰輪中	1/12	8.6	—	—	内:ロクロナダ 外:ロコロケリ	密	良	紅2,5106.3	安養寺跡 (8.0)				
29	001-08	土師器	瓶	灰輪中	1/12	12.6	—	—	内:ロクロナダ	密	良	紅2,5106.3	安養寺跡 (8.0)				

第5表 安養寺跡第8次・古墳遺跡第9次・北野遺跡第9次調査出土遺物一覧表②

No.	実測 番号	種類	形態	遺構	想定 種類度	法量(㌘)			表面調査 (括弧はその特徴)	出土	積成	色調 (外観)	特記事項
						口徑	體直	その他					
30	002-01	土師器	江戸鉢形	施漆手印	1/12	31.4	—	—	内:ヨクナダ 外:後ノタケ 外口縁に石片有り	黒	良	江戸・黄緑 10927/4	安養寺跡 (B 23)
31	001-02	土師器	杯	SP902	1/12	13.4	3.3	—	内:ナガ・ヨコナダ 外:ナダ・オナズ	黒	やや良	浅黃緑 10928/3	古墳遺跡 (9 23)
32	001-03	土師器	杯	SP902	1/12	15.9	3.9	—	内:ナガ・ヨコナダ 外:ナダ	黒	良	橙 7.0187/6	古墳遺跡 (9 23)
33	001-04	土師器	瓶	SP902	1/12	16.9	—	—	内:ナガ・ヨコナダ 外:ハラケヌリ	黒	良	橙 7.0187/7	古墳遺跡 (9 23)
34	001-04	土師器	瓶	SP902	1/12	19.0	2.4	—	内:ミヤキヌリ・ヨコナダ 外:ハラケヌリ	黒	良	橙 7.0187/8	古墳遺跡 (9 23)
35	002-02	土師器	瓶	SP902	1/12	21.8	1.85	—	内:ヨクナダ 外:ハラケヌリ	黒	良	橙 597/6	古墳遺跡 (9 23)
36	002-01	土師器	瓶	SP902	4/12	22.9	2.35	—	内:ナガ・ヨコナダ 外:ハラケヌリ	黒	良	橙 597/6	古墳遺跡 (9 23)
37	000-01	土師器	高杯	SP902	2/12	24.9	—	—	内:ヨクナダ 外:ミガタ	黒	やや良	橙 597/6	古墳遺跡 (9 23)
38	004-01	土師器	瓶	SP902	2/12	34.0	—	—	内:ハラメ・ヨコナダ 外:ハラメ	牛糞窯	良	浅黃緑 10928/4	古墳遺跡 (9 23)
39	001-05	土師器	甕	SP902	1/12	37.6	—	—	内:ヨコナダ・ハラメ・ハラ ケヌリ・ハラメ	黒	良	江戸・黄緑 10927/6	古墳遺跡 (9 23)
40	001-06	土師器	甕	SP902	1/12	37.5	—	—	内:ヨコナダ・ハラメ・ハラ ケヌリ・ハラメ	黒	良	江戸・黄緑 10927/4	古墳遺跡 (9 23)
41	001-01	土師器	甕	SP902	1/12	46.7	—	—	内:ヨコナダ・ハラメ・ハラ ケヌリ・ハラメ	黒	やや良	浅黃緑 10928/3	古墳遺跡 (9 23)
42	001-07	土師器	甕	SP902	1/12	47.0	—	—	内:ヨコナダ・ハラメ 外:ハラメ	黒	やや良	浅黃緑 7.0187/4	古墳遺跡 (9 23)
43	006-02	土師器	甕	SP902	2/12	48.0	—	—	内:ヨコナダの後にハラケヌリ ヨコナダ 外:タマハコの後ハラメ	黒	やや不良	灰黃緑 10926/2	古墳遺跡 (9 23)
44	005-02	土師器	甕	SP902	3/12	22.0	—	—	内:ハラメ・ヨコナダ 外:タマハコの後ハラメ	牛糞窯	不良	江戸・黄緑 10926/4	古墳遺跡 (9 23)
45	007-01	土師器	把手付甕	SP902	2/12	36.0	—	—	内:ヨコナダ・エ瓦タタケ 外:ハラメ・ハラメ把手付(把手) 外:ヨコナダ把手付(把手)	黒	やや良	灰黃緑 10926/2	古墳遺跡 (9 23)
46	002-03	土師器	杯	SP903	5/12	11.6	3.3	—	内:ナダ・ヨコナダ 外:ナダ・オナズ	黒	やや良	橙 597/6	古墳遺跡 (9 23)
47	003-06	土師器	杯	SP903	1/12	14.0	3.5	—	内:ヨクナダ 外:ナダ・オナズ	黒	やや不良	黄土 2.5 Y 5/3	古墳遺跡 (9 23)
48	002-04	土師器	甕	SP903	1/12	18.0	—	—	内:ハラメ・ヨコナダ 外:ハラメのヨコナダ	黒	やや良	浅黃緑 7.0188/4	古墳遺跡 (9 23)
49	005-01	土師器	甕	SP903	1/12	23.0	—	—	内:折腰して、6ハラメ・ヨ コナダ 外:ハラメ	牛糞窯	やや良	江戸・橙 7.0187/4	古墳遺跡 (9 23)
50	006-01	土師器	高杯(脚付)	SP903	12/12	—	—	—	内:ハラメ 外:ナダ・オナズ	黒	良	江戸・橙 7.0187/4	古墳遺跡 (9 23)
51	004-01	土師器	甕	SP905	3/12	14.0	—	—	内:ヨクナダ 外:ハラメ	牛糞窯	やや良	江戸・黄緑 10927/4	古墳遺跡 (9 23)
52	003-01	土師器	杯	SP906	1/12	12.0	3.6	—	内:ミガタ・ヨコナダ 外:ミガタ	黒	良	橙 597/6	古墳遺跡 (9 23)
53	003-03	土師器	甕	SP906	1/12	28.8	—	—	内:ナガ・ヨコナダ 外:ハラメ	黒	良	江戸・黄緑 10926/4	古墳遺跡 (9 23)
54	002-02	土師器	甕	SP906	1/12	35.0	—	—	内:内面摩耗・ナダ・ヨコナ ダ 外:ハラメ	黒	良	江戸・黄緑 10926/4	古墳遺跡 (9 23)
55	002-05	土師器	甕	SP906	3/12	14.3	—	—	内:ナダ・ヨコナダ・ハラメ 外:ハラメのヨコナダ	黒	やや良	浅黃緑 10926/4	古墳遺跡 (9 23)
56	004-02	土師器	江戸鉢形	SP906	1/12	25.0	—	—	内:エ瓦タタケ・ヨコナダ 外:ハラメ	牛糞窯	良	灰黃緑 10927/6	古墳遺跡 (9 23)
57	001-08	土師器	杯	P11903	1/12	18.0	—	—	内:ヨコナダ 外:ナダ・オナズ	黒	良	橙 7.0187/6	北野遺跡 (9 23)
58	001-07	土師器	甕	SP901	小方	—	—	—	内:ヨクナダ	黒	やや良	浅黃緑 10926/3	北野遺跡 (9 23)
59	001-03	土師器	甕	SP901	少量	20.0	—	—	内:ヨクナダ	黒	やや良	江戸・黄緑 10927/4	北野遺跡 (9 23)

第IV章 露越遺跡の調査

第1節 調査概要

露越遺跡は多気郡明和町斎宮に所在する。高度機能確保基盤整備事業斎宮地区（牛葉線）の事業に伴い、発掘調査を行った。事業としては埋設水路を道路側帯下に設置する内容である。調査区は幅10m、延長90mに及ぶ。

記録類は、事前に座標ピンを20m毎に4箇所設

定した。また、標高地については、調査区付近にあつた3級基準点を使用して作成を行った。表土から遺構面までの堆積土を重機（バックホー）で除去し、遺構検出・掘削、記録類等の作成は三重県埋蔵文化財センターで行った。

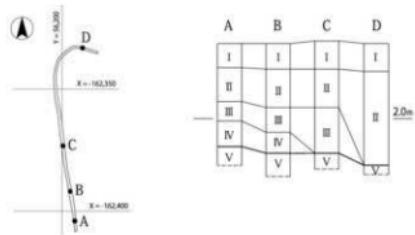
第2節 基本層序

露越遺跡の地形は、南の玉城丘陵、東の明星面：中位段丘面、北の斎宮面：高位段丘面に囲まれた谷底地形となっている。調査区の平均標高は南が26m、北が255mであることから北に低くなる標高差となる。基本層序は、上から道路造成土（I層）、擾乱：灰黄褐色中粒砂（II層）、旧耕土：褐色シリト～細粒砂（III層）、包含層：極暗褐色シルト（IV

層）、地山：にぶい黄橙色粘土（V層）の順である。遺構検出面は、範囲確認調査の成果から地山（V層）の上面で検出を行った。現況面から遺構検出面までの堆積厚は、平均して-0.8mである。遺構は、調査区南では明瞭な遺物を含む溝や土坑を確認したが、調査区北半分においては昭和の圃場整備に伴う開削により大部分が削平を受けていた。



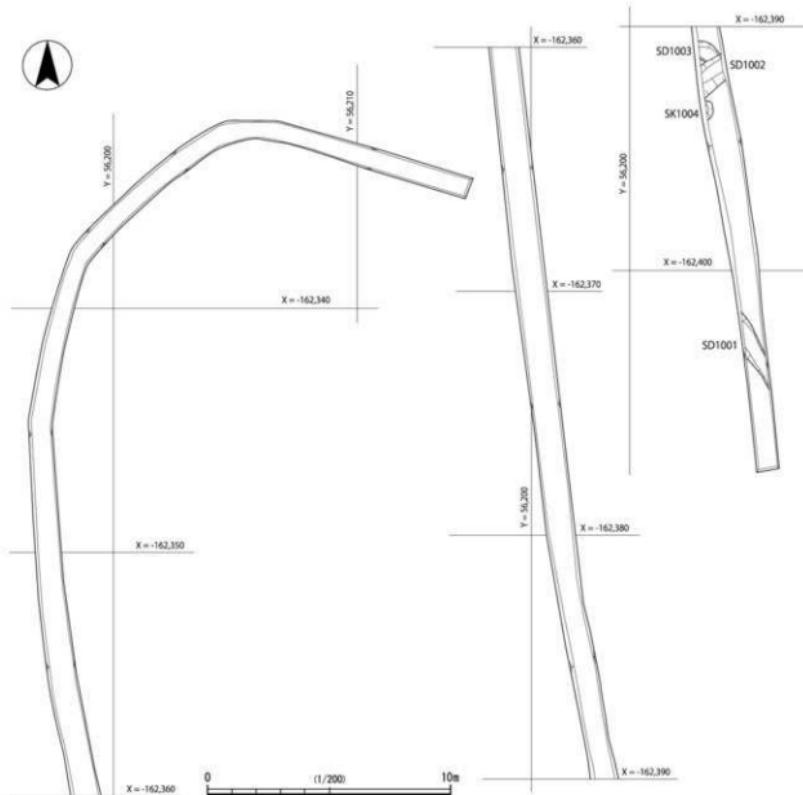
第22図 調査区位置図 (1:1000)



基本層序対応表

- I 造成土 [道路]
- II 灰黄褐色中粒砂 [現代擾乱]
- III 褐色シルト～細粒砂 [旧耕土]
- IV 極暗褐色シルト [包含層]
- V に深い黄褐色粘土 [地山]

第23図 基本層序図



第24図 調査区平面図 (1:200)

第3節 遺構

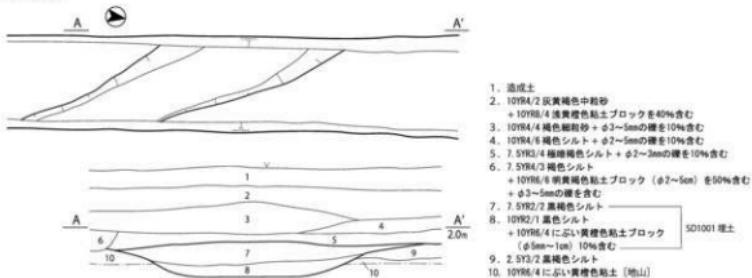
溝 SD1001 長さ1.6m以上、幅0.7m、深さ0.4mの断面箱形状の溝である。溝の時期は、須恵器が出土しており、8世紀代であると考えられる。

溝 SD1002 長さ1.15m以上、幅1.1m、深さ0.3mの緩い断面V字形状を呈する溝である。溝は、出土した土師器の年代から12世紀代と考えられる。

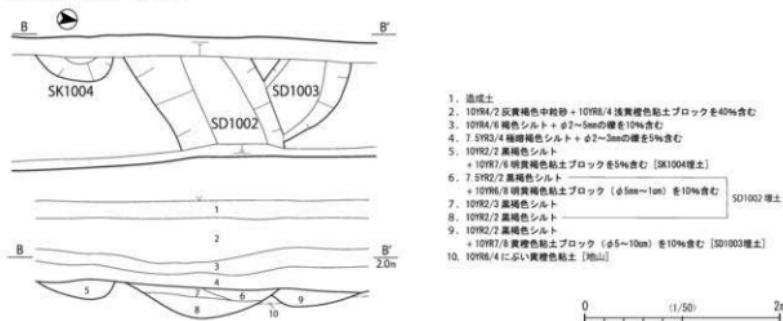
溝 SD1003 長さ1.1m以上、幅0.7m、深さ0.2mの断面箱形状の溝である。遺物は出土しなかったが、SD1002に先行し、12世紀以前と考えられる。

土坑 SK1004 長軸0.8m、短軸0.25m、深さ0.2mの土坑である。遺物の確認はされなかった。

SD1001



SD1002・1003, SK1004



第25図 個別遺構図 (1:50)

第6表 露越跡第10次調査遺構一覧表

遺構名	図版	種別	規模 (m)	深さ (m)	主な出土遺物	時期	備考
SD1001	第24図	溝	1.6 × 0.7	0.4	須恵器	8世紀代	箱形、遺物1点
SD1002	第24図	溝	1.15 × 1.1	0.3	土師器(杯)	12世紀代	箱形、遺物1点
SD1003	第24図	溝	1.1 × 0.7	0.2	なし	12世紀以前	箱形
SK1004	第24図	土坑	0.8 × 0.25	0.2	なし		

*調査区外へ続くため、規模については確認できる実数、深さについては代表的な数値で示した。

*図版は、本書の平面図番号に対応する。

第4節 遺物

今回の調査で出土した遺物は、包含層からの出土がほとんどである。時期は古代から近現代に及ぶ。

以下、造構や出土層位ごとに出土遺物について述べる¹⁾。

SD1002 出土遺物

1は土師器の皿である。口縁部から体部にかけての破片である。外面上半と内面にはヨコナギが施され、外面下半ではオサエ痕跡が認められる。12世紀代と考えられる。

SD1001 出土遺物

2は須恵器の碗と考えられる。底部から体部にかけての破片である。底部外面は平底となっており、ロクロケズリが底部から体部にかけて施される。

包含層出土遺物

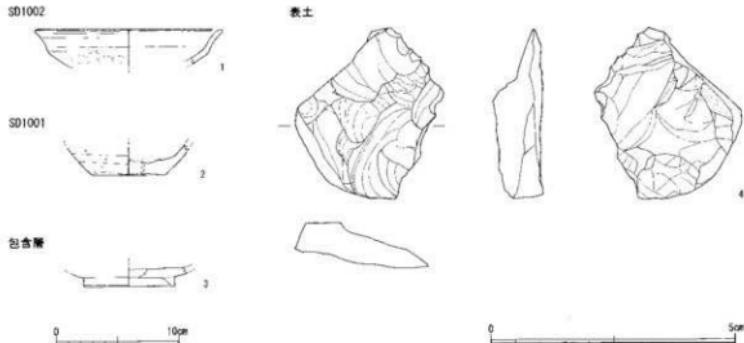
3は山茶碗である。底部から体部にかけての破片である。第3型式に該当し、12世紀前半と考えられる。

表土

4は剥片である。チャート製である。時期は不明。

註

- 1 土器および陶器の分類・編年については、以下の文献による。
愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史 別編第2巻 中世・近世編Ⅱ系』愛知県、愛知県史編さん委員会 2016『愛知県史 別編第3巻 3猪団』愛知県、伊藤裕作 2008『中北勢地域の中世土器』『三重歴史 資料編考古2』三重県



第26図 出土遺物実測図（土器・陶器は1/1、石器は1/4）

第7表 露越遺跡第10次調査出土遺物一覧表

【凡例】

*番号は遺物図版・写真図版中の各遺物の番号と対応する。

*番号番号は実測図作成時に各遺物の実測図に付与した整理番号である。

*出土の色調は『新版 横手土色名』による。

*鉄器・陶器等の保存度については、剥離される口縁部ないし底部を12分割したうちの残存度を示している。

No.	実測番号	種類	層位	底縁・周位	層位 底縁	法面 (cm - a)	基面調整・加工調整			胎土	焼成	色調・石材 (外側)	特記事項
							口径	底高	その他				
1	001-01	土器	見	SH1002	2/12	15.2	—	—	内：ナギ・ヨコナギ 外：セゼヌチナ	泥	良	灰褐色 1.097/A	露越 (10次)
2	001-02	須恵器	見	SH1001	4/12	—	—	—	内：ロクロナギ 外：ロクロケズリ	泥	良	灰褐色 2.097/B	露越 (10次)
3	001-03	器物	山茶碗	包含層	5/12	—	—	—	内：ロクロナギ 外：ロクロケズリ・胎土ココナ グ・赤土	泥	良	灰褐色 2.097/B	露越 (10次)
4	001-04	石器	剥片	包含層	剥片	3.0/7.0	高さ：3.0	7.79 g	自然面	—	—	チャート	露越 (10次)

第V章 安養寺跡・古堀遺跡における自然科学分析

第1節 安養寺跡第8次調査出土炭化材の樹種同定

(1) はじめに

安養寺跡は玉城丘陵から北へ延びる台地上の先端に立地する。安養寺跡では、古代の土師器焼成土坑を確認した。土師器焼成土坑は明和町近辺で多く確認され、土師器を焼くための土坑とされる。樹種同定による目的は土師器を焼成するために使用した燃焼材を分析することにある。今回は、SF808の床面直上で出土した炭化材で同定を行った。

(2) 試料と方法

試料は、奈良時代の土師器焼成土坑であるSF808から出土した炭化材1袋である。袋中より15点の炭化材を抽出し、樹種同定を行った（第8表）。

各試料について、復元直径と残存半径、残存年輪数の計測を行なった。復元直径は、1cm刻みの同心円に試料を当てて求めた。残存半径は試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸

着を施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行なった。

(3) 結果

同定の結果、試料はいずれも広葉樹のコナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節と呼ぶ）であった。同定結果を第8表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、第28図に走査型電子顕微鏡写真を示す。

コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科
1a-1c (1-1), (1-3), 3a (1-5), 4a (1-8), 5a (1-9), 6a (1-10), 7a (1-11)

年輪のはじめに大型の道管が1~3列並び、晩材部では急に径を減じた厚壁で丸い道管が、放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

第8表 安養寺跡第8次調査出土炭化材の樹種同定結果

試料No.	出土遺構	層位	樹種	残存半径(cm)	残存年輪数	復元直径(cm)	時期
1-1	SF808	20層	コナラ属クヌギ節	2.2	5	5.0	奈良時代
1-2	SF808	20層	コナラ属クヌギ節	1.9	3	4.0	奈良時代
1-3	SF808	20層	コナラ属クヌギ節	1.7	4	4.0	奈良時代
1-4	SF808	20層	コナラ属クヌギ節	1.3	4	4.0	奈良時代
1-5	SF808	20層	コナラ属クヌギ節	1.6	4	4.0	奈良時代
1-6	SF808	20層	コナラ属クヌギ節	1.3	4	3.0	奈良時代
1-7	SF808	20層	コナラ属クヌギ節	1.2	2	4.0	奈良時代
1-8	SF808	20層	コナラ属クヌギ節	2.1	4	5.0	奈良時代
1-9	SF808	20層	コナラ属クヌギ節	1.6	4	-	奈良時代
1-10	SF808	20層	コナラ属クヌギ節	1.7	3	4.0	奈良時代
1-11	SF808	20層	コナラ属クヌギ節	1.0	2	4.0	奈良時代
1-12	SF808	20層	コナラ属クヌギ節	1.0	3	4.0	奈良時代
1-13	SF808	20層	コナラ属クヌギ節	1.3	4	-	奈良時代
1-14	SF808	20層	コナラ属クヌギ節	1.3	1	-	奈良時代
1-15	SF808	20層	コナラ属クヌギ節	0.8	1	2.0	奈良時代

(4) 考察

土師器焼成土坑であるSF808から出土した炭化材は、いずれもクヌギ節であった。試料はいずれも土師器焼成のための燃料材と考えられる。クヌギ節は堅硬な樹種で、燃料材としては、火力は高くなりが長時間燃焼し続けるという材質を持ち、現在でも薪炭材として多く利用されている（伊東ほか2011）。今回同定した炭化材は15点すべてがクヌギ節であり、クヌギ節が選択的に利用されたと考えられる。

また同定した15点のうち、復元直径を確認できた12点はいずれも復元直径が5cm以内であった（第27図）。燃料材には、小径のクヌギ節が利用されたと考えられる。

安養寺跡に近接する古堀遺跡の第9次調査においても土師器焼成土坑の樹種同定が行われており、いずれもクヌギ節であった（本章第2節参照）。奈良時代においては、安養寺跡周辺にクヌギ節が多く生育していたと考えられる。

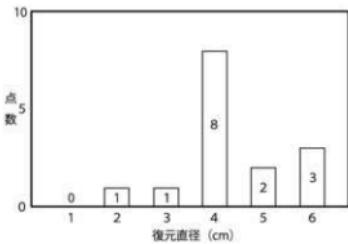
松阪市の西野田遺跡では、奈良時代の土師器焼成土坑からマキ属の炭化材が多く産出している（株式会社古環境研究所2009）。安養寺跡は、西野田遺跡

とは窓跡周辺の森林の植生が異なっていたと考えられる。

（株式会社パレオ・ラボ 小林克也）

参考文献

- 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和徳
2011『日本有用樹木誌』海青社。
株式会社古環境研究所 2009「西野田遺跡における樹種同定」『西野田遺跡発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター



第27図 復元直径分布

第2節 古堀遺跡第9次調査出土炭化材の樹種同定

(1) はじめに

古堀遺跡は玉城丘陵から北へ延びる台地上の先端に立地する。古堀遺跡では、古代の土師器焼成土坑2基を確認した。この内、SF902は遺構の残存状況が良好であった。SF902の床面直上からは土師器焼成に使用した可能性がある薪材が出土した。よって、樹種同定による目的は土師器を焼成するために使用した燃料材を分析することにある。

(2) 試料と方法

試料は、奈良時代の土師器焼成土坑であるSF902から出土した炭化材1袋である。袋中より19点の炭化材を抽出した（第9表）。

各試料について、復元直径と残存半径、残存年輪数の計測を行なった。復元直径は、1cm刻みの同心円に試料を当てて求めた。残存半径は試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で削断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスピッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行なった。

(3) 結果

同定の結果、試料はいずれも広葉樹のコナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節と呼ぶ）であった。同定結果を第9表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、第29図に走査型電子顕微鏡写真を示す。

コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科 1a-1c (2-1), 2a (2-2), 3a (2-3), 4a (2-4), 5a (2-5), 6a (2-6), 7a (2-7)
年輪のはじめに大型の道管が1~3列並び、晩材部

では急に径を減じた厚壁で丸い道管が、放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は單穿孔を有する。放射組織は同性で、單列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

(4) 考察

土師器焼成土坑であるSF902から出土した炭化材は、いずれもクヌギ節であった。試料は、いずれも土師器焼成のための燃料材と考えられる。クヌギ節は坚硬な樹種で、燃料材としては、火力は高くないが長時間燃焼し続けるという材質を持ち、現在でも薪炭材として多く利用されている¹⁾。今回同定した炭化材は19点すべてがクヌギ節であり、クヌギ節が選択的に利用されたと考えられる。

復元直径は、いずれも1cmであった。燃料材には、小径のクヌギ節が利用されたと考えられるが、

復元直径が19点すべてで同じであったため、同じ1つの燃料材が碎けて複数点になっている可能性もある。

古堀遺跡に近接する安養寺跡の第8次調査でも土師器焼成土坑の樹種同定が行われており、いずれもクヌギ節であった（本章第1節参照）。奈良時代においては、古堀遺跡の周辺にクヌギ節が多く生育していたと考えられる。

松阪市の西野田遺跡では、奈良時代の土師器焼成土坑からマキ属の炭化材が多く産出している²⁾。古堀遺跡は、西野田遺跡とは窯跡周辺の森林の植生が異なっていたと考えられる。

（株式会社パレオ・ラボ 小林克也）

註

- 1) 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和徳 2011『日本有用樹木誌』海音社。
- 2) 株式会社古環境研究所 2009『西野田遺跡における樹種同定』『西野田道路発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター編

第9表 古堀遺跡第9次調査出土炭化材の樹種同定結果

試料No.	出土遺構	層位	樹種	残存半径(cm)	残存年輪数	復元直径(cm)	時期
2-1	SF902	10層	コナラ属クヌギ節	0.5	2	1.0	奈良時代
2-2	SF902	10層	コナラ属クヌギ節	0.5	2	1.0	奈良時代
2-3	SF902	10層	コナラ属クヌギ節	0.5	2	1.0	奈良時代
2-4	SF902	10層	コナラ属クヌギ節	0.5	2	1.0	奈良時代
2-5	SF902	10層	コナラ属クヌギ節	0.5	2	1.0	奈良時代
2-6	SF902	10層	コナラ属クヌギ節	0.3	1	1.0	奈良時代
2-7	SF902	10層	コナラ属クヌギ節	0.5	2	1.0	奈良時代
2-8	SF902	10層	コナラ属クヌギ節	0.5	2	1.0	奈良時代
2-9	SF902	10層	コナラ属クヌギ節	0.5	2	1.0	奈良時代
2-10	SF902	10層	コナラ属クヌギ節	0.5	2	1.0	奈良時代
2-11	SF902	10層	コナラ属クヌギ節	0.5	2	1.0	奈良時代
2-12	SF902	10層	コナラ属クヌギ節	0.5	2	1.0	奈良時代
2-13	SF902	10層	コナラ属クヌギ節	0.5	2	1.0	奈良時代
2-14	SF902	10層	コナラ属クヌギ節	0.5	2	1.0	奈良時代
2-15	SF902	10層	コナラ属クヌギ節	0.5	2	1.0	奈良時代
2-16	SF902	10層	コナラ属クヌギ節	0.5	2	1.0	奈良時代
2-17	SF902	10層	コナラ属クヌギ節	0.5	2	1.0	奈良時代
2-18	SF902	10層	コナラ属クヌギ節	0.5	2	1.0	奈良時代
2-19	SF902	10層	コナラ属クヌギ節	0.3	1	1.0	奈良時代

第3節 安養寺跡第8次調査のプラント・オパール分析

(1) はじめに

安養寺跡の第8次調査では、奈良時代の土師器焼成土坑が検出されている。焼成時に使用された燃料材について検討するために、土師器焼成土坑内から土壤試料が採取された。以下では、試料について行ったプラント・オパール分析の結果を示し、考察を行った。

(2) 分析試料および方法

分析試料は、土師器焼成坑SF811から採取された炭混じり褐色(7.5YR4/4)シルトである。この試料について、以下の手順で分析を行った。

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスピーブ(直径約0.04mm)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについて、ガラスピーブが300個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、第29図に載せた。

(3) 結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスピーブ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求めた(第10表)。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は、試料1g当りの検出個数である。

検鏡の結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属機動細胞珪酸体、他のタケア科機動細胞珪酸体、キビ属機動細胞珪酸体、ウシクサ属機動細胞珪酸体の6種類の機動細胞珪酸体と、イネ穎に形成される珪酸体の破片、ポイント型

珪酸体の産出が確認できた。このうち、ネザサ節型機動細胞珪酸体とキビ属機動細胞珪酸体、ウシクサ属機動細胞珪酸体の産出が多く、ネザサ節型機動細胞珪酸体は139,200個、キビ属機動細胞珪酸体は115,100個、ウシクサ属機動細胞珪酸体は523,600個である。

(4) 考察

今回の分析試料で産出が目立つのが、ウシクサ属機動細胞珪酸体やネザサ節型機動細胞珪酸体、キビ属機動細胞珪酸体である。これらの葉身が燃料材に使われていた候補として挙げられる。また、イネ機動細胞珪酸体については、稲作跡の検証をする際に判断基準とされている5,000個/gよりも多く産出しており、イネの初穂で形成されるイネ穎破片を伴っている。よって、燃料材にはイネの葉身や初穂も使用されていた可能性がある。なお、ネザサ節やイネの葉身、イネ穎が土師器焼成遺構の燃料材として試料された可能性が指摘されている例としては、西野田遺跡がある¹⁾。西野田遺跡では、キビ族やウシクサ属の機動細胞珪酸体はわずかに産出するのみで、今回のSF811の試料ほど多くはない。西野田遺跡の結果と比較すると、安養寺跡(第8次)の土師器焼成坑では、キビ属やウシクサ属の機動細胞珪酸体の産出が目立つ。ただし、古環境研究所も述べているように、上記の燃料材の候補は確定的ではなく、遺構外から植物珪酸体が流れ込んできた可能性なども考えられるため、遺構外の土壤など比較試料を用いた検討が必要であろう。

(株式会社パレオ・ラボ 森 将志)

註

- 1) 古環境研究所 2009「西野田遺跡における植物珪酸体分析」
『西野田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター

第10表 試料1g当りのプラント・オパール個数

イネ (個/g)	イネ穎破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	ササ属型 (個/g)	他のタケア科 (個/g)	キビ属 (個/g)	ウシクサ属 (個/g)	ポイント型 珪酸体 (個/g)
16,100	6,900	139,200	8,100	1,200	115,100	523,600	1,200

第4節 古堀遺跡第9次調査のプラント・オパール分析

(1) はじめに

古堀遺跡（第9次）では、奈良時代の土師器焼成土坑が検出されている。焼成時に使用された燃料材について検討するために、土師器焼成土坑内から土壤試料が採取された。以下では、試料について行ったプラント・オパール分析の結果を示し、考察を行った。

(2) 分析試料および方法

分析試料は、土師器焼成土坑SF902の10層から採取された炭泥じり黒褐色（5YR3/1）シルト（にぶい赤褐色（5YR4/4）極細粒砂焼土ブロック混ざる）である。この試料について、以下の手順で分析を行った。秤量した試料を乾燥後、再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトルビーカーにとり、約0.02gのガラスピース（直径約0.04mm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱水機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波モジュライザによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについて、ガラスピースが300個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、第30図に載せた。

(3) 結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスピース個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求めた（第11表）。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は、試料1g当りの検出個数である。

検鏡の結果、イネ属機動細胞珪酸体とネササ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、他のタケアキ科機動細胞珪酸体、キビ属機動細胞珪酸体、ウシクサ属機動細胞珪酸体の6種類の機動細胞珪酸体

と、イネ穂に形成された珪酸体の破片の産出が確認でき、ネササ節型機動細胞珪酸体、キビ属機動細胞珪酸体、ウシクサ属機動細胞珪酸体の産出が目立ち、イネ機動細胞珪酸体は47,900個、イネ穂破片は70,600個、ネササ節型機動細胞珪酸体は135,900個、キビ属機動細胞珪酸体は66,600個、ウシクサ属機動細胞珪酸体は199,800個である。

(4) 考察

今回の分析試料で産出が目立つのが、イネ機動細胞珪酸体やイネ穂破片、ネササ節型機動細胞珪酸体、キビ属機動細胞珪酸体、ウシクサ属機動細胞珪酸体である。これらの葉身やイネ粉殻が燃料材に使われていた候補として挙げられる。なお、土師器焼成土坑やカマド土壤の植物珪酸体分析の例としては西野田遺跡があり、ネササ節や、イネの葉身や粉殻が燃料材として利用されたと指摘されている（古環境研究所2009）。一方で、西野田遺跡ではキビ属やウシクサ属の機動細胞珪酸体はわずかに産出するのみで、今回のSF902の試料ほど多くはない。西野田遺跡の結果と比べた場合、今回の試料はキビ属やウシクサ属の機動細胞珪酸体の多産が目立つ。ただし、古環境研究所¹⁾も述べているように、上記の燃料材の候補は確定的ではなく、遺構外から植物珪酸体が流れ込んできた可能性なども考えられるため、遺構外の土壤など比較試料を用いた検討が必要であろう。

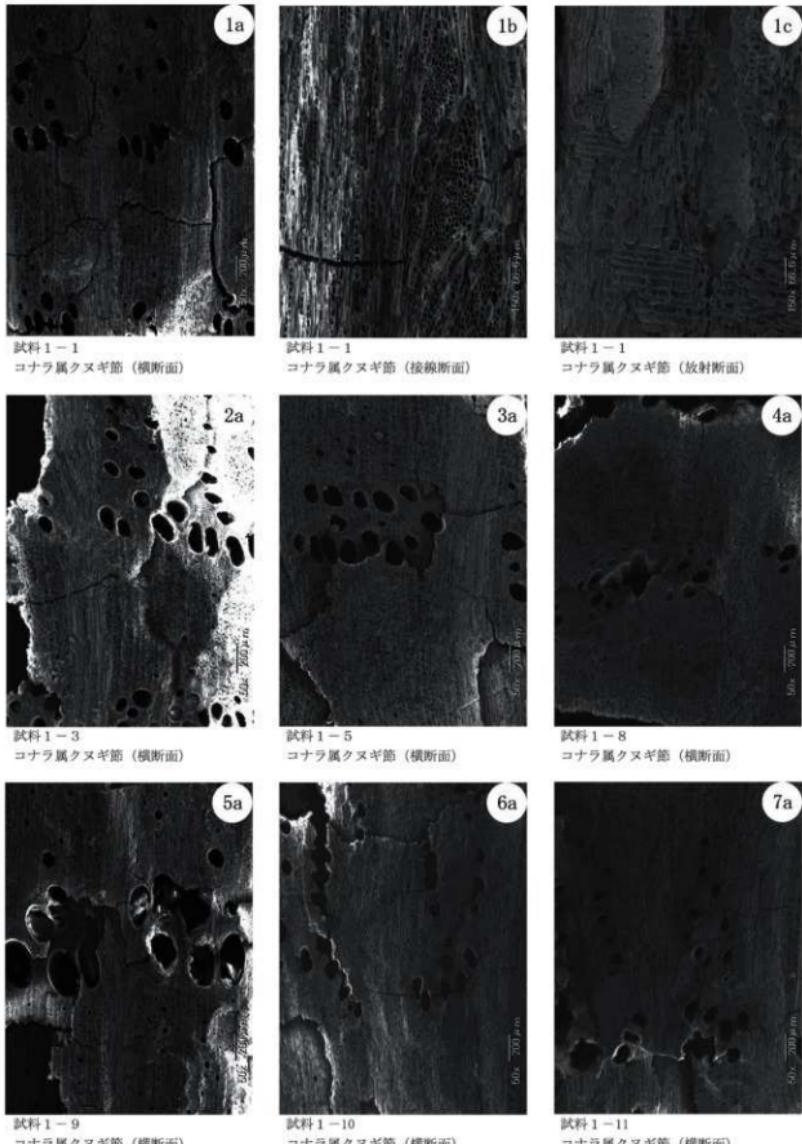
（株式会社パレオ・ラボ 森 将志）

註

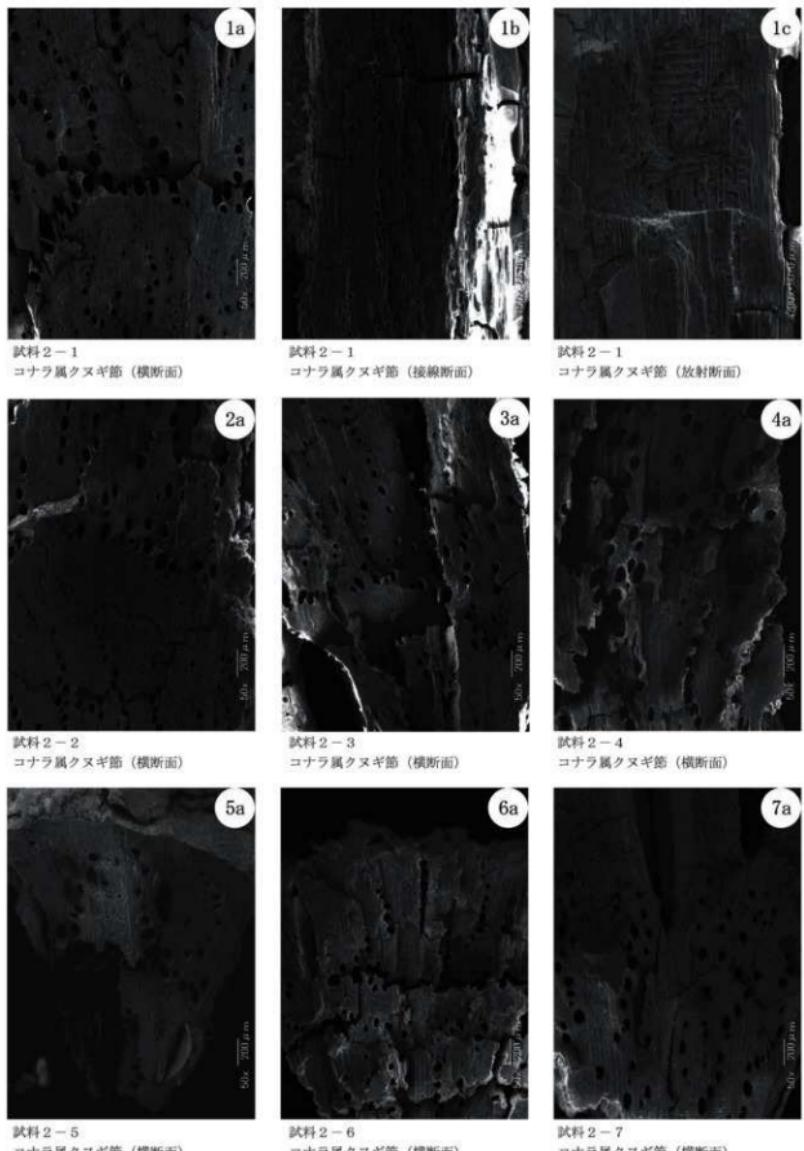
1) 古環境研究所 2009「西野田遺跡における植物珪酸体分析」
『西野田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター

第11表 試料1g当りのプラント・オパール個数

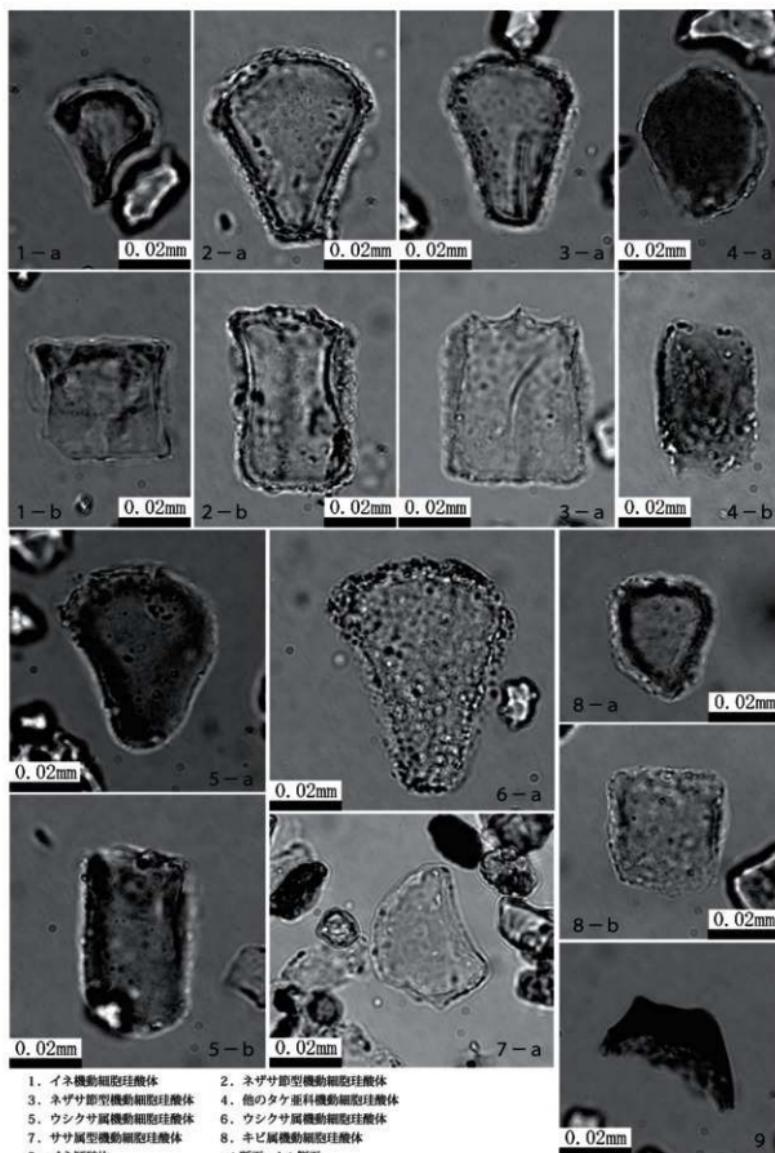
イネ (個 / g)	イネ穂破片 (個 / g)	ネササ節型 (個 / g)	ササ属型 (個 / g)	他のタケアキ科 (個 / g)	キビ属 (個 / g)	ウシクサ属 (個 / g)
47,900	70,600	135,900	20,000	9,300	66,600	199,800



第28図 安養寺跡第8次調査出土炭化材の電子顕微鏡写真



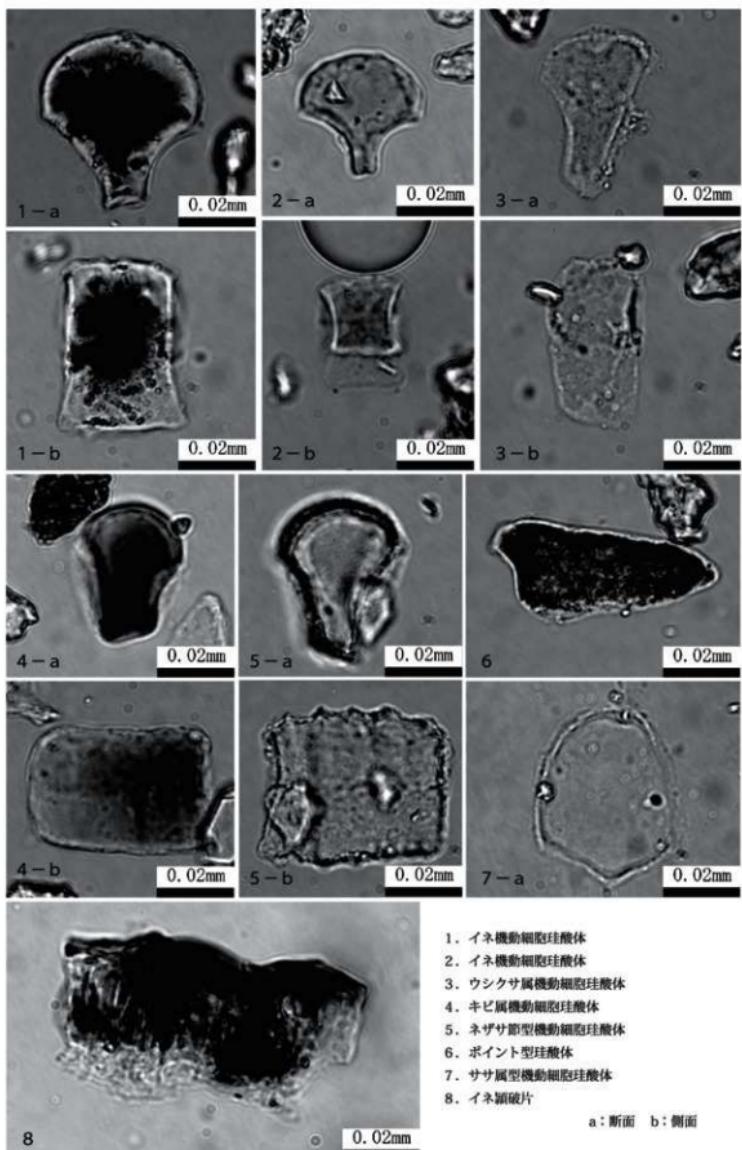
第29図 古堀遺跡第9次調査出土炭化材の電子顕微鏡写真



1. イネ機動細胞珪酸体
 2. ネザサ節型機動細胞珪酸体
 3. ネザサ節型機動細胞珪酸体
 4. 他のタケ亜属機動細胞珪酸体
 5. ウシクサ属機動細胞珪酸体
 6. ウシクサ属機動細胞珪酸体
 7. ササ属型機動細胞珪酸体
 8. キビ属機動細胞珪酸体
 9. イネ類破片
- a: 断面 b: 側面

0.02mm

第30図 安養寺跡第8次調査植物珪酸体の電子顕微鏡写真



第31図 古堀遺跡第9次調査植物珪酸体の電子顕微鏡写真

第VI章 総 括

(1) 各遺跡の調査成果

安養寺跡（第8次）では、中世の安養寺跡に関係する遺構は確認されなかった。寺域としては、中世の遺物が極少数であったことから明和町の調査¹⁾で確認された堀を境にして、今回の調査区まで西に擴がらないことが明らかになった。一方、本次調査を中心となる時代は飛鳥時代から奈良時代に該当する7世紀後半から8世紀中頃にかけての遺構である。主な遺構としては、土師器焼成土坑4基や堅穴建物1基の他、土師器生産に関係する土坑などを確認した。出土遺物は土師器の杯や皿、甕などが多い。須恵器の出土は極少量であった。

古堀遺跡（第9次）では、8世紀前半の土師器焼成土坑2基などを確認した。成果としては、過去の古堀遺跡の調査と同様な傾向であった²⁾。周辺には、多くの土師器焼成土坑が分布している可能性が高い。

北野遺跡（第9次）では、奈良時代の溝や土坑、ピットが検出された。溝幅や土坑の規模は1mを越えない小規模なものが多い。ピットをいくつか確認したが、調査範囲が狭小であることから掘立柱建物になるかは判断し難い。遺物の量は少なく、今回の第9次調査全体でコンテナ1箱に満たない。なお、過去の調査成果である土師器焼成土坑は確認されなかつた³⁾。遺跡の北限に調査区が位置することから、遺構や遺物の量が薄い地域であることを今回の調査で確認した。

露越遺跡（第10次）では、古代や中世の遺構を検出した。過去の調査⁴⁾でも、同時期の遺構が確認されていることから斎宮とは別に古代から中世を通じての集落域が展開していた可能性が考えられる。

(2) 土師器焼成土坑

土師器焼成土坑は安養寺跡・古堀遺跡で計6基を確認した。土師器焼成土坑の年代は、出土した土器から7世紀後半から8世紀中頃の遺構である。旧有爾郷では、伊勢神宮や斎宮に供給する土器が製作されてきたとされている。旧有爾郷（現在の明和町中南部）には丘陵が多く、土師器焼成土坑の立地は丘陵上に多いと考えられてきた。しかし、今回の北野

遺跡の調査成果から必ずしも丘陵上に広く分布することではないことが明らかになった。

また、土師器焼成土坑SF902とSF808で採取した炭化材の樹種同定と土壤のプラント・オパール分析を行った。炭化材の樹種同定では、燃焼材として使用された材はクヌギであることが判明した。クヌギの特性は萌芽が早く、切株から芽が出て太い幹になるのに約10年サイクルとされ、かつ乾きやすさから燃料材に最適とされる⁵⁾。今後の樹種同定による成果を期待したいが、明和町で現在確認されている土師器焼成土坑500基以上の燃料材を供給するのにクヌギは最適であったと考えられる。また、直径復元により、2~3cm代の太さが多く、幹と言うよりは枝くらいのサイズになることが想定される。出土した炭化材のサイズは直径復元と大差がないことから生材を使用したと考えられる。これは木炭を使用した場合、焼成後の残存状況が芳しくない傾向にあるからである。また、プラント・オパール分析ではウシクサ属などを焼成時に樹木と併用していたことが明らかになった。以上から土師器焼成に関係する遺跡で木炭窯が確認されていないのは、生材で土器焼成が行われていたと考えられる。

今回の調査で、旧有爾郷における土師器生産の一端が明らかになった。

註

- 1) 乾哲也・味噌井拓志 2016『安養寺跡を探る－安養寺跡発掘調査概要』明和町
- 2) 明和町斎宮跡・文化観光課「明和町文化財解説シート 土器つくりのさと－有爾郷－No.1」
- 3) 上村安生・竹田憲治 1995『北野遺跡（第2・3・4次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、竹田憲治・広岡公夫 1996『北野遺跡（第5次）発掘調査概報』三重県埋蔵文化財センター
- 4) 大西素行 1980『露越遺跡』昭和54年度県営圃場整備事業 地域埋蔵文化財発掘調査報告 三重県教育委員会
- 5) 上村武 2001『木と日本人 木の系譜と生かし方』学芸出版社

写 真 図 版



安養寺跡・古堀遺跡・北野遺跡航空写真（南東から：左上の森林帯が調査地）



安養寺跡・古堀遺跡・北野遺跡全景写真（南東から）



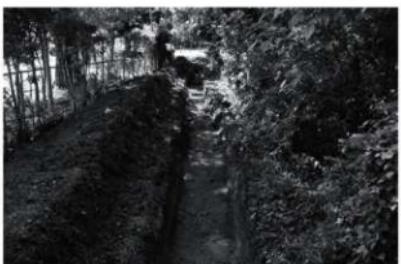
調査区全景1 SK819・821付近（北から）



調査区全景2 SK819・821付近（北から）



調査区全景3 搅乱（北から）



調査区全景4 SK807付近（北から）



調査区全景5 SF808・SD822付近（西から）



調査区全景6 SD813付近（北から）



調査区全景7 SD801付近（北から）



調査区全景8 SF804付近（南から）



SK802 土層（南東から）



SK803 土層（西から）



SK805 土層（南西から）



SF804 土層（西から）



SF804 完掘状況（北から）



SF806 土層（西から）



SK807 土層（西から）



SK807 遺物出土状況（南から）



SD809 土層（東から）



SF808・SD822 完掘状況（南から）



SF808 検出状況（西から）



SF808 土層（西から）



SF811 検出状況（西から）



SF811 完掘状況（西から）



SK810 完掘状況（南西から）



SD814 土層 (北東から)



SD817 完掘状況 (東から)



SK819・821 完掘状況 (北東から)



SD820 完掘状況 (北から)



SH812・Pit4 完掘状況 (東から)



調査区全景 1 SK907 付近（北から）



調査区全景 2 調査区南端付近（南から）



調査区全景 3 SK905 付近（北から）



SF902 遺物出土状況（南西から）



SF902 掘出状況（南西から）



SF902 南土層（東から）



SF902 北土層（東から）



SF902 西土層（南から）



SF902 遺物出土状況（西から）



SF902 完掘状況（南西から）



SF902 燃土層断面（西から）



SK905 遺物出土状況（北西から）



SK905 土層（西から）



SK907 土層（西から）



SK905・906・907 完掘状況（北西から）



調査区全景 1 SD906 付近（南西から）



調査区全景 2 SD911 付近（南西から）



調査区全景 3 Pit5・Pit6 付近（南西から）



SD101 完掘状況（北東から）



SK902・903・904・905 完掘状況（南西から）



SD911 完掘状況（南東から）



SK912・913 完掘状況（北東から）



SD917 完掘状況（南西から）



1



2



3



4



5



6



9



10



11



12



14



18



21



27



30



31



36



37



38



39



40



41



43



45



46



49



51



54



56





調査区全景 C 地点付近（南西から）



調査区土層 B 地点（東から）



SD1002・1003、SK1004 完掘状況（南から）



SD1002・1003、SK1004 土層（東から）



SD1001 完掘状況（南から）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	あんようじあと (だいはちじ)・ふるぼりいせき (だいくじ) きたのいせき (だいくじ)・つゆこしいせき (だいじゅうじ) はくつちょうさほうこく							
書名	安養寺跡（第8次）・古堀遺跡（第9次）・ 北野遺跡（第9次）・露越遺跡（第10次）発掘調査報告							
副書名	多気郡明和町上野・斎宮							
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	380							
編著者名	鐸木厚太							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515 - 0325 三重県多気郡明和町竹川503 電0596 - 52 - 1732							
発行年月日	2018年3月9日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
あんようじあと 安養寺跡	多気郡明和町 うえの 上野	24442	523	34度 31分 56秒	136度 37分 46秒	2016.10.11～ 2017.3.14	延べ700m ²	平成28年 度高度水 利機能確 保基盤整 備事業
ふるぼりいせき 古堀遺跡		24442	746					
きたのいせき 北野遺跡		24442	228					
つゆこしいせき 露越遺跡	多気郡明和町 斎宮	24442	207	34度 32分 6秒	136度 36分 45秒			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
安養寺跡	寺社跡	奈良	土師器焼成土坑、 土坑、溝	土師器（杯・皿・甕 など）				
古堀遺跡	生産遺跡	奈良	土師器焼成土坑、 土坑、溝	土師器（杯・皿・ 甕・筒形土器など）				
北野遺跡	生産遺跡	奈良	土坑、溝	土師器（杯・甕など）				
露越遺跡	散布地	中世	土坑、溝	土師器、陶器、石器				
要旨	安養寺跡では、奈良時代の土師器焼成土坑や堅穴建物、良好な土器がまとまって出土した土坑を確認した。古堀遺跡では、奈良時代の遺構・遺物が確認され、中でも土師器焼成土坑の残存状況と土器資料が良好な事例となる。北野遺跡では、奈良時代の遺構や遺物が散布的に確認された。以上の3遺跡は、奈良時代の土師器焼成に関する一連の痕跡だと考えられる。露越遺跡では、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物を確認したが、主な時代は中世前期で、山茶碗や土師器が出土した。							

三重県埋蔵文化財調査報告 380

安養寺跡（第8次）・古堀遺跡（第9次）
北野遺跡（第9次）・露越遺跡（第10次）
発掘調査報告

2018（平成30）年3月9日

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 株式会社アイブレーン
